
オーナーズ 聖域の目覚め

月神 皇夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オーナーズ

聖域の目覚め

【Nコード】

N7985T

【作者名】

月神 皇夜

【あらすじ】

ただ平穏な日々を望む中学二年生の少年、村主^{すぐり} 春彼^{はるか}はある日、人間の精神に巢食うモノ、ネスターの襲撃を受ける。

春彼の命を奪おうと襲いかかるネスター。絶体絶命の窮地を救ったのは能力^{スキル}を行使し、ネスターと戦う者、能力所有者^{スキルオーナー}の少女、風音^{かざね} 柚姫^{ゆずめ}と一羽の鷹だった。

この日を境に春彼の日常は常識の通用しない非日常へと変化していく。

覚醒夢

序章 覚醒夢 かくせいむ

村主 すぐりはるか 春彼は夢を見ていた。

初めは何の変哲もない、恐らく目が覚めれば記憶にすら残らないような夢だった。しかし、それがどこからか奇妙なものに变化した。夢の中だというのに春彼の意識は不思議とはつきりしていて、ここが夢の中であることを認識している。

風景は言葉で言い表すことが出来ない。まるで、色や形といった概念がなく、天も地も、重力も存在しないような世界だ。視界は霞がかかったように曇っていて、はつきり見ようと目を凝らせば逆にぼやけて見える。

そんな夢の中で春彼は奇妙な感覚に陥っていた。

そこは穏やかで光に溢れていて、じっとしているだけで心が幸福感に満たされていく。しかし、ひどく居心地が悪かった。絶対にありえない事が起きている、と春彼は思った。それが何なのかは分からないがその違和感を春彼は肌で感じていた。

そんな夢の中を漂いながら春彼はその違和感の原因について思いを巡らせていた。明らかに何かがおかしい。春彼の本能はそう春彼に告げている。しかし、その原因は靄のように形がなく、不透明なものようだった。あと少しで分かりそうなところに来ているのにそれ以上先に進むことが出来ない。春彼は悶々と足掻くように考え続けた。

その時、夢の中に声が響いた。

『人の心に闇が巢食おうとも、我が領域に蔓延 はびこる事は許されない』

男とも女ともとれる不思議な響きを持った声だった。子供の声にも

聴こえるが、大人の声にも老人の声にも聴こえる。その口調は詠うようであり、淡々としていた。その声は確かに春彼の耳に届いているはずなのに一瞬でも気を弛めれば聴こえなくなるような儚さを持っている。春彼はじっと耳を澄まし、その声に集中した。その声は何か重要なことを言っているような気がしていた。

『闇を怖れるのなら……』

再び不思議な響きを含んだ声が響く。しかし、その声は途中で聴こえなくなった。その理由は春彼の意識が声から今、気が付いた違和感の原因に向いたからだ。

「ここには、ないんだ……」

春彼はそう呟くように言った。

その途端、夢の世界がじんわりと薄れ始める。意識が現実へと目覚めていく。穏やかさも光も幸福感も崩れるように消えていった。

「そんなこと、ありえないのに……」

醒めていく意識の中で春彼は呟く。夢の中には人間の生きる世界に必ず存在するものが欠落していた。それが欠落した世界など存在するはずがないと春彼は強く思った。

「ここには……」

覚醒したばかりの耳に自分の声が聴こえた。

春彼はハッとして目を覚ます。すると、そこは違和感のある夢の中ではなく、みなれた自分の部屋のベッドの上だった。

覚醒夢（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

更新が鈍足かもしれませんが暖かい目で見守っていただければ幸いです。

日常

第一話 日常

春^{はるか}彼はベッドの上で呆然としていた。

耳の奥にまだ自分の声が残っている。ただ、自分が何と言ったのかは分からない。夢を見て、何かを言ったのだという自覚はあったが夢の内容は思い出せない。まるで、深い濃霧の中に沈んでしまったようだ。

びびびびつ、と電子音が鳴る。春彼は反射的に体を起こし、ぱんつと枕元の目覚まし時計のスイッチをはたかくように押した。

「…………六時十分。朝、か」

春彼はそう、ぼそりと呟いた。そして、眠気を追い払うように体を伸ばすと温かい布団の中から何の未練も残さずに抜け出す。のんびりとまどろんでいるような時間はない。春彼はベッドから見て左にある窓のカーテンを開けた。透き通った朝日が春彼を照らす。春彼の体の中にある体内時計は朝日を感じして一日が始まったことを身体中に知らせている。知らせを受けた体の昨日は次々に目を覚まし、春彼を包んでいた倦怠感はずぐに取り払われた。その時、春彼の勉強机の上で念のため設定しておいた携帯電話のアラーム機能が起動した。バイブレータの振動で同じく机の上にあった写真立てがぱたんと倒れる。春彼はハツとしてアラームを切ると写真立てを手にとった。

「おはよう。父さん」

写真の中で微笑む今は亡き父親。その物言わぬ姿に春彼は語りかけた。春彼の父親は戦場カメラマンだった。大きな手が温かくて、優しい笑顔のよく似合う人で、そんな父親が春彼は好きだった。その父親が死んだのは春彼が小学三年生の時だ。弟は保育園の年長、妹は年少だった。

戦場で流れ弾に当たり、ほぼ即死だと聞いた。その時の悲しみは今もありありと思い出せる。春彼はぼんやりと写真を眺めていた。父親との思い出が次々に蘇ってきて胸を締め付ける。もう五年も経ったというのにこんなにもはつきりと思い出してしまうのは恐らく、命日が近いからだろう。

（もう、五年も経つんだ……）

そう心の中で呟いて春彼は写真立てを机に置いた。そして、寝間着から中学の制服に着替える。一年以上着続けているそれは下が黒いズボンで靴下は灰色。上は白いシャツに臍^{えんじいろ}脂色のネクタイ。その上から黒い上着を着る。

「……大丈夫。約束は守ってるから」

春彼はそう、父親に語りかけるように呟いて部屋を出た。

家はひっそりと静まりかえっている。誰よりも早く目覚め、動き出すのは決まって春彼だった。

春彼はまだ眠っているであろう弟と妹を起こさないように忍び足で階段を降りる。そして、肌寒い一階の廊下を歩き、右側にあるリビングに続くドアのノブに手をかけ、ドアを開けた。

リビングには先客がいた。
ソファをベッド代わりにいびきをかいて眠る母親に春彼はため息をつく。

「いつも布団で寝ろって言ってるのに……」

そう呟いて春彼はテーブルの上に散らばった原稿用紙を手を取った。そこにはミミズが這ったような書いた本人にしか読めないであろう字が書きなぐられている。

「しかも原稿上がってないし……」

春彼は更に深いため息をついた。女流ミステリー作家である母親が締め切りに間に合うか間に合わないかのぎりぎりで執筆しているのはいつものことだが、今月は是が非でも速く終わらせてもらわないと困るのだ。春彼は慣れた手付きで原稿用紙をまとめると母親を揺すり起こそうとした。しかし、

「……彼、方……」

母親の呟くような寝言に春彼の手は止まった。彼方、かなた父親の名前だ。妻からすれば良い夫。子供たちからすれば良い父親だった。それが抜けた穴はいくら時間をかけても埋まることはない。母親も普段は明るく振る舞っているが命日が近くなれば普段通りにはいかないだろう。

「……」

春彼はふ、と目を伏せると踵を返し、キッチンに向かった。

（父さんの、夢……だろうな）

そう思いながら春彼は蛇口を捻り、やかんに水道水を注ぐ。そしてそれをコンロに置き、火を付けた。その間、春彼はカップを二つ出し、そこにインスタントコーヒーの粉と多目の砂糖を入れる。しばらくするとやかんの中が沸騰した。春彼は火を消して、沸いたばかりのお湯をカップに注ぎ、スプーンでその中身を混ぜる。最後に牛乳を目分量で加えて完成だ。

春彼はその一つをキッチンの前にある食卓の上の父親の写真の前に置いた。大の甘党だった父親はこの甘いコーヒーが大好きだった。

「んー……。春彼あ？ コーヒー淹れたの？」

匂いに釣られたのか、のっそりと母親は起き上がり、まだ眠そうな口調で訊いた。いかにも、まだ半分眠ってます。というような顔で、目もしっかり開いていない。春彼はやれやれと思いながら、

「ああ、淹れた。でも、飲む前に顔洗って歯磨いてちゃんとしてくれ」

と言った。母親は眠った頭では言葉の意味を解釈しきれなかったのか、しばらく間を置いてから、

「はあい……」

と間延びした答えを返した。そして、のそのそリビングから出て行く。冬眠から目覚めた熊のようなその後ろ姿に春彼は苦笑すると冷蔵庫を開けた。そこからハムのパックと卵を四つ取り出す。次に野菜室を開けた。その中からトマトを二つと一玉のレタスを取り出す。

まな板と包丁をさつと水洗いしたところでリビングのドアが開いた。

「おっはよー、アニキ！」

「おはよう、兄ちゃん」

リビングに活発な少女と温厚そうな少年が入ってきた。その二人に春彼はにこり、と微笑みかける。

「おはよう。智夏、秋良」

春彼はそう言つてトマトのヘタを切り、スライスしていった。レタスも食べやすい大きさに千切る。

「まだ食パン焼いてないよね。用意していい？」

キッチンに入つた秋良がそう春彼に訊く。いつもながら気のきく弟に春彼は

「ああ。頼む」

と答えた。すると、秋良は人懐っこい笑みを浮かべて頷き、棚の上にある食パンの袋に手を伸ばす。

「あたしも、あたしもっ。なんか手伝う！」

そう言つて智夏もキッチンに駆け込んだ。

ことあるごとに智夏は秋良と同じでいようとする。同じことをして同じように誉められる。すると智夏は本当に嬉しそうに笑うのだ。

秋良が手本であり、憧れなのだろう。と春彼は思う。そして、その

模範となつてゐる秋良が何かと優等生なのが春彼としてはありがたく、不安だつた。

智夏はよく家で不平不満をこぼしているが秋良はそれを聞いて智夏をなだめてばかりで弟が不平不満を述べている姿は見たことがない。
としふそつあつ
歳不相応に大人びていて兄としてはやや心配だつた。

「アニキー。何かしごとー」

智夏の声に春彼はハツと我に返つた。そして、ぶんぶんと頭を振る。ぼんやりする時間があるほど朝のキッチンには暇ではない。

「じゃあ、智夏は冷蔵庫からドレッシングとマーガリンとジャム出して」

「りょーつかいつ」

春彼からの指示に智夏は有り余る元氣が見てとれる返事を返す。末っ子である智夏は秋良とは対照的で活発な性格だつた。例えるのなら、夏の太陽だ。たまに騒がしすぎることもあるが、それでも底抜けに明るく、村主家のムードメーカーである。

「春彼ー、コーヒーってあれ？ あんた達もう起きたの？」

リビングに戻つてきた母親の第一声がそれだつた。きちんと目を開き、背筋を伸ばしている様子から目は覚めたようだ。春彼は母親の分のコーヒーをキッチンのカウンターに置くと、

「母さん。時計見て」

と言つた。母親はコーヒーを受け取り、時計に目をやる。壁に掛か

っている時計は午前七時十分を指していた。

「あー。この時間なら起きてるか」

「お母さん、また時間感覚ボケてるね」

母親のセリフに食パンをトースターにセットし終えた秋良が困ったような、もう慣れたような微妙な顔をする。そんな息子に母親はこまかすような笑みを浮かべた。

「あははー。バレたー？」

「バレるも何も、リビングで寝てた時点で昨日は一晩中原稿と睨みあつてたんだろ」

春彼がそう呆れたように言うドレスシングとマーガリン、ジャムをテーブルに置いた智夏が

「えーっ。またあ？」

と非難するような声を上げた。

「あたしたちにはちゃんとふとんでねろーっていつつもいうのにつ」

「お母さんもちゃんと休んでっていつも言ってるのに」

「それに原稿上がってないし。担当の人が困るんだから締め切りは守れよ」

次々と言い放たれる子供達の意見に母親はコーヒーを一口すすって、

「……あー、うまい」

と、遠い目をして言った。そんな母親に長男はため息をつく。

「現実逃避禁止。あと、座って飲むこと」

春彼はそう言っ、て、熱したフライパンの上で卵を割る。じゅうつ、という音が沈黙に響いた。

「……彼方あ。春彼が厳しいよー」

「お父さんでも言うと思うよ」

秋良の一言が止めだった。母親はがくつと項垂れる。そして、止めが刺された効果音のようにトースターがチーンツと音を立てる。まるで見計らっていたようだ。

「秋良、智夏。皿出して」

春彼は四人前の目玉焼きを作りながらそう二人に指示を出す。

「はい」

「はいはいーっ」

兄からの指示に二人はすぐ返事を返す。母親に関してはいつものことだ。何かとへこんだり、沈んだりしている。とりあえず、朝食が完成すれば復活するだろう。

「はい、アニキ！ お皿っ」

そう言つて智夏が春彼に四枚の皿を重ねて差し出した。春彼はコン口の火を止め、その皿を受けとる。

「ありがとう、智夏」

「兄ちゃん、智夏。飲み物、牛乳でいい？」

冷蔵庫の前に立つた秋良はそう二人に問いかける。

「ああ」

「うんっ」

二人の答えを聞くと秋良は冷蔵庫を開け、牛乳のパックを取り出した。春彼は受け取った皿にレタスとトマト、ハム、目玉焼き、トーストを盛り付ける。

「智夏。カップ出してくれるか？」

手元を見たまま春彼がそう言つと智夏はくすくすと笑つて

「もう出したよーっ」

と言つた。まるで、悪戯を成功させたかのような。春彼が顔を上げてテーブルを見ると確かにカップが出ている。

「あ、早いな。ありがとう」

春彼はなかなか自分で気が付くことのない妹の先手を打った行動に驚いた。秋良効果か、と内心呟く。

「えっへへー」

智夏はそう嬉しそうに笑った。その隣で秋良も微笑んでいる。

「……ん！？ ごはんっ!？」

へこんでいた母親は途中から眠っていたようだ。朝食の匂いに釣られて飛び起きた。そんな家族に春彼はふつと微笑む。そして、平和だなと思う。これ以上望むものはない。ただ、こんな毎日が続けばいい。春彼は心から願っていた。

（父さんが死んだ時の悲しみと苦しみは二度と味わいたくないから）
そう思いながら春彼は朝食の席に着いた。

*

朝食の後、母親は残りの原稿に取りかかり、秋良と智夏は共に小学校へ行った。その後、春彼は手早く自分の弁当を作ってから家を出る。

春彼の家は通う中学まで徒歩二十分といったところにある。その道程は住宅街を抜け、造園業の所有地の横を通り、大通りを渡るというものだ。春彼はその道程の住宅街を抜けたところをぼんやりと歩いていた。道にはちらほらと同じ制服の生徒が歩いている。一人、音楽を聴きながら歩いている男子生徒や、他愛のない話をしながら歩く数人の女子生徒。ふざけあう男子生徒達。携帯を打ちながら歩く女子生徒。それぞれ考えていることは違っだろう。しかし、系統

としては今時の若者が考えるようなことのはずだ。春彼の思考はその系統から完全にはみ出していた。

（今日はスーパーで野菜のセールが……。あ、でも駅向こうのスーパーでも……。トイレットペーパーも買わないと……。今月の家計は……。だったら、今晚の夕飯は……）

春彼の脳内では近辺のスーパーを記した地図とその広告の内容、家計簿、冷蔵庫の中身が同時展開されていた。それはまるで緻密な計算式ちみつのようで気を抜けば全てが崩れてしまうだろう。その時、

「はーるかっ！」

という背後からの声と共に春彼の背中に衝撃が走った。思わず前方に数歩よろけた春彼はため息をついた。こんなことをする人物は一人しか思い当たらない。

「……海。痛いんだけど」

春彼はそう言っただけで恨めしげにその人物を横目に睨んだ。おかげで春彼の脳内で展開されていた情報は全て消し飛んでしまった。隣に立つ少年はけらけらと明るく笑う。

「はっはっは。悪い、悪い」

見るからに軽い謝罪に春彼はやれやれともう一度ため息を着いた。

藤村 海ふじむら かいはこういう男だ。仕方がない、と思う。

海という名前に相応しく、日焼けした肌に黒い短髪。野球部で鍛えたがっしりとした体格は海の男の雰囲気をかもしだしているこの男子生徒は他人に対して閉鎖的な春彼の数少ない友人だ。傍目には春

彼と海が幼稚園からの幼馴染みには見えないだろう。

「しかし、今日も春彼はひ弱だなー」

そう言っただけはしばしと春彼の背中を叩いた。春彼は二度目のため息をついて、

「人間の筋肉の量が一日で激変したら気味が悪いだろ。そもそも、野球部のお前と俺を比べるなよ」

と言う。すると海は眉間にしわを寄せ、うーん、と唸った。

「そりゃそーだけだよ。スーパーのセールで人混みを掻き分けて戦利品を山ほど抱えてる時の春彼ならもうちょいたくましいぜ？」

「それは……。生活かかってる訳だしな」

春彼はそう言っただけで肩を竦める。小説家の収入は不安定だ。節約するにこしたことはない。となると、あの目をぎらつかせた主婦の群れの中から商品を手に入れるためには必死にならざるを得ないのだ。

「ほーんと、所帯染みてんなー。さっきもぼんやり歩ってたけどスーパーがどーのとか思ってたんだろ」

海はそう言っただけで、そりゃないか！　と言っただけで笑う。春彼はなんとも言えず黙り込んだ。

「……まさか凶星か？」

春彼の沈黙に気付く、海が問いかける。春彼は少しムツとして、

「……悪いか」

と呟くような低い声で答えた。

大体、買い物は学校帰りに行く春彼にとつてただ歩くだけの登校や休み時間は買い物の予定を立てる時間だ。あまりというより一切、人に話したことはない。そもそも、こんなことを人に話すような話の流れにはならない。それはもちろん海との会話でも言えることだ。よつて、春彼は今までこのことを海に話したことはない。海にとつてこのことは余程の衝撃の事実だったのか、

「ぶ……っ！ あっはははは！ マジかよ！」

と腹を抱えて笑い出した。その笑い声に周囲の生徒がちらりとこちらを見る。春彼は恥ずかしさに顔が少し熱くなるのを感じ、

「海っ」

と戒めるように海を呼んだ。海は笑いすぎで目頭に涙を浮かべながら、

「悪い……っ。ぶ、くくく……っ」

と答える。春彼は四度目のため息をついた。

自分の他人とは少し違う生活や思考を恥じたことはない。ただ、目立つことは苦手だった。人の注目を浴びることが嫌いなのだ。好奇の目に晒され、不要な同情や上から目線の哀れみを寄せられる。父親の死が原因でそんな経験を何度もした。その度に体に嫌悪感が走り、心がざわめいた。

幸い、道行く生徒達はすぐに春彼と海を興味の対象から外し、自分

の興味の対象へと戻っていった。春彼は五度目のため息をついて、無言の圧力をかける。その威圧感に海は浮かべていた笑みを引き吊らせた。

「いや、ほんと悪かったってっ」

その言葉に春彼はふん、と懨然とした様子で鼻を鳴らした。二人は大通りの赤信号で足止めを喰らい、立ち止まる。二人の目の前を車が排気ガスを吐き出しながら過ぎ去っていく。それが奏でる騒音が二人の間で響いていた。海は春彼の様子をうかがっている。そこで春彼は追い討ちをかけた。

「……そういえば、今日は英語の課題の提出日だなー」

「うぐっ!？」

効果は抜群のようだ。海は更に笑みを引き吊らせ春彼を見た。春彼は横目でちらりと海を見ると口角をにい、と吊り上げ意地悪く笑った。

「当然。終わってるんだよな？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！ 申し訳ありませんでした春彼様！ ですから何とぞ御慈悲をーっ！」

今すぐ土下座をしかねない勢いで海はまくしたてる。春彼は六度目のため息を二重の意味で着いた。

意味の一つはちゃんと終わらせておけよ、という呆れ。もう一つは反応が大袈裟だという呆れだ。

「海、うるさい。分かったから静かにしてくれ」

そう春彼がやれやれといった様子で言うと海は深く深く安堵の息をついた。

「あああー……。助かった……」

まるで、死刑宣告を回避した罪人のような反応に春彼はやれやれと首を竦めた。

「お前は太褌なんだよ」

春彼はそう言っただけを見る。もう校舎が見えてきた。薄汚れた白い壁を眺めると今日も一日、頭に様々な知識が詰め込まれるのかと思う。そのことに對して春彼は何の抵抗もなかった。むしろ、とにかく知識を詰め込んで高校受験に備えたいと思う。しかし、海はあからさまに苦虫を噛み潰したような渋面を作った。

「ああ……。だりい……」

「校舎見るたび同じことを言うのはどうかと思うぞ」

勉強嫌いの友人の決め台詞ともいえる聞き飽きた言葉に春彼は素っ気なく応じる。すると、海はどこか考え込むように口を閉ざした。いつもなら、春彼に對して冷たい、枯れているなどと反論が返ってくるはずだ。春彼はいつもと違う友人の様子に

「どうした？」

と訝しげに訊いた。海はうーん、と眉間にしわを寄せ、悩んでいる

ように見えた。

「なんかなあ。こう……。なんついたらいいんだろ。こう、頭ん中がもやもやーってしてて、それでそのもやが体ん中這いずり回ってるっていうか……」

「……具合が悪いなら保健室に行くか、帰った方がいいんじゃないか？」

人一倍体の丈夫な幼馴染みの珍しい体の不調に春彼はそう提案した。すると海はいつものように明るく笑い、

「そんなむづかしー顔すんなよ、春彼！ 大丈夫だって。試合も近いし、休んでられっかつ」

と言った。そして、自分の眉間をとんとん、と指差す。

「つーか、なんで春彼がここにしわ寄せてんだよ。オレが寄せんならともかく」

そう言われて春彼はハツとした。いつの間にか自分が眉間にしわを寄せていたようだ。

「ま、心配ご無用ってことだ！ あ、でも試合は観にこいよ！」

春彼はふつと苦笑を浮かべた。試合は観にこいよ、の手前に隠された言葉が手に取るように分かってしまう。

「差し入れを持って、てことだろ」

春彼の一言に海は満面の笑みで親指を立てた。きーんこーん、とチャイムの音が聴こえる。八時二十五分を告げるチャイムだ。二人は顔を見合わせると小走りに走り出した。

日常（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございます。ありがとうございました。第二話を誠意執筆中です。

痛みが告げるもの

第二話 痛みが告げるもの

きーんこーんかーんこーん、とチャイムが鳴り響いた。放課後が始まったことを告げている。担任がホームルームの終了を宣言し、生徒達はがやがやと騒ぎ出した。勉強から解放されたことを喜ぶ生徒、寄り道の相談をしあう生徒、部活に向かう生徒など、それぞれがそれぞれ一斉に口を開けば騒がしくもなる。そんな中、春彼は一人静かに帰り支度を済ませていた。頭の中ではスーパーまでの最短距離が弾き出されている。春彼はバッグを担ぐと席を立った。そして、誰とも口をきかずに教室を出る。

学校で春彼が友人と呼べるのは海ぐらいだった。父親を失う以前はそれなりに友人がいた。しかし、父親を失ってから家事と弟、妹の世話を優先するようになり、友人との付き合いは稀薄になった。そんな春彼から一人、二人と友人は離れていったが、春彼はそれを取る足らないことと思っている。家族と友人を秤にかけたなら圧倒的に家族が重いに決まっている。

「はーるーかー！」

突然廊下で呼び止められ、春彼は足を止めた。振り向くと海がこちらへ駆け寄ってきている。春彼は体をそちらに向けた。

「なんだ。元気そうだな」

朝とは違ってかわつてはつらつとした様子に春彼が安心してそう言う。海はニツと笑って、

「まあな！」

と言った。そんな海に吊られて春彼もフツと微かに微笑む。

友人が離れていく中、海だけは残っていた。春彼が家事で手一杯の時はよく秋良と智夏の面倒を見てもらい、母親とも仲が良い。友人と家族を比べた秤では家族が重いが、海と家族ならその重さは同等だと春彼は思っている。

「で、どうしたんだよ。これから部活だろ？」

春彼がそう問いかけると海は満面の笑みで

「春彼、これから買い物だろ？ 差し入れは唐揚げな！」

と言った。つまり、差し入れの注文をしにきたようだ。春彼は心の中でどてつと転け、それだけのために来たのか、と内心つつこみを入れた。海は表情をきらきらと輝かせて春彼に期待を込めた視線を送っている。そんな友に春彼はふと芽生えた悪戯心で取り澄ました様子で、

「ピーマンの肉詰めの手定」

と簡潔に答える。その途端、海の様子が一瞬にして強ばった。予想通りの反応に春彼は吹き出しそうになるのをこらえ、ポーカーフェイスを装う。心の中では今朝の海のように腹を抱える勢いで笑っていた。

「オレがピーマン苦手って知ってて言ってるだろ、春彼！」

そう海は必死に訴える。春彼はうつすらと意地の悪い笑みを浮かべ

ると

「あー、そうだったなあ。幼稚園の頃なんて……」

と幼い目を眺めるような遠い目をした。すると、海は顔色をサアツと青くする。

海とピーマンの戦いは幼稚園の頃から続いている。春彼はそれをする時には傍観し、時には巻き込まれていた。その戦いの数はそれこそ星の数だ。そして、それは海にとって封印したい過去達である。

「ぎゃーっ。それについては忘れるーっ」

またもや予想通りの海の反応に春彼はにやりと笑い、そろそろこのやり取りを終わりにして買い物に行くか、と思った。そのためには顔面蒼白な友に一言そう告げなければならぬ。春彼はすつと肩をすくめ、呆れたような笑みを作った。

「冗談だ」

春彼の一言に海が口から魂が抜けていつているような顔をする。漫画でよくあるこのシーンを実写化させるのなら誰よりも上手く演じられるのではないかと思えるほどの状態だ。この幼馴染は人のことを何だと思っているんだ、と春彼は内心呟いた。

「俺は幼馴染みの試合の差し入れに苦手なものを持ってくような悪趣味じゃない」

春彼がそうすました顔で素っ気なく言うと海は苦々しい渋面を作った。

「春彼……。冗談キツいつて……。春彼の冗談でマジっばいんだよ……」

そう言つて海は肩からがつくりと脱力する。自覚のない春彼はふうと困つたように息を吐いた。自覚のないものは制御しようがない。とりあえず、脱力したまま恨めし気に自分を見上げてくる幼馴染をなだめるため、頭の中で唐揚げの予算を計上する。

「悪かつた。唐揚げだろ？ 材料が安かつたら買ってくる」

春彼がそう言つと海は一気に表情を輝かせた。

「よっしゃっ」

ころころと表情とテンションを変える幼馴染み春彼はやれやれと微かに苦笑すると教室を覗きこんで時計を確認する。現在時刻は午後三時四十二分だ。スーパ―までが徒歩十五分。タイムセールを開始が午後四時丁度だ。

「そろそろ行かないとタイムセールに間に合わない。じゃあな、海」

春彼がそう言つと海は、はははっと笑つた。

「さっすが春彼！ タイムセールつて中学生がそんなナチュラルに使いこなせる言葉じゃねーぞっ。ま、期待してるからな！ 唐揚げ！」

「ああ」

春彼はそう微笑を浮かべ答えると、海に背を向け、まばらに同級生

が歩く廊下を歩き出した。

*

がらん、と靴が減った昇降口で靴を履き替え、正門をくぐり、学校の敷地から出た途端、春彼は違和感を覚えた。頭の奥底にぼやけた感覚がある。意識を集中させてそれが何なのか見極めようとするが、雲を掴むような感覚で分らない。春彼は、ふう、とため息をついた。疲れているのかもしれないと思う。だからといってタイムセールは待ってくれない。春彼は足早に歩き出した。

（夕飯は魚にして、野菜とハムも買う。それと歯磨き粉が切れそうだったな……）

歩きながらそんなことを考えていると頭の違和感が和らいでいく気がした。なんだ、やっぱり疲れていたんだ。と春彼は思った。後に響かせないためにも早く寝ようかと考えながら住宅街に足を踏み入れる。その時、頭の中の違和感が急激に膨れ上がり、シャボン玉のように弾けた。そして、違和感が小さな頭痛に変わる。春彼はふと足を止めた。

（やけに、静か……だな）

普段は何かしらの生活音が聴こえるはずの住宅街が静まりかえっていた。子供の声やテレビの音が家から聞こえてこない。風さえも何かに遮断されたかのように止んでいる。見慣れた家並み。駐車場に止まっている車。自転車、子供の遊具。電信柱。道と有料駐車場を隔てるフェンス。今、春彼が見ている風景はいつも通りの見慣れた景色だが、春彼の心は不安でざわついていた。そして、まるでその不安を吸収して大きくなっているように頭痛が強くなっていく。春

彼はその痛みに表情を歪めた。脈を打つような痛みはまるで春彼に何かを訴えているようだ。急激に強くなっていく痛みには春彼は数歩進んでよろけ、電信柱に手を着き、体を支えた。とくん、とくん、と頭痛は脈打ちながら春彼に訴えている。それはまるで警告しているようだ。春彼の額を汗が伝い、コンクリートに滴った。動悸も激しくなる。痛みの波が春彼に襲いかかった。春彼は立ち尽くすのが精一杯の状況で一向に収まらない頭痛に歯を食い縛り、耐えた。その時、ふと視線を感じた。悪寒がゆったりと背中を撫でる。周囲の気温がぐん、と低くなった気がした。それと同時に頭痛が刺すような鋭い痛みに変わる。

「う、く……っ」

春彼の口から呻き声が漏れた。頭はガンガンと痛み、鉛が乗せられたように重い。しかし、春彼はゆっくりと頭をあげた。視線の主はまだ春彼を見ている。それが何なのか確かめようとした。視線は上から威圧的に降ってくる。春彼は重い頭で何とかその方向を見た。どこにでもありそうな一軒家の褪せたような赤い色の屋根の上にそれは居た。

「な……っ!？」

なんだあれは、という言葉は言葉として形をなす事が出来ず、春彼は驚きに目を見開いてそれを見つめていた。

それはどの生物にも当てはまらない姿をしていて、無機的な白の丸い体の左右から蜘蛛の足のような足が生えている。口や鼻はなく、その白い体に血のような赤い双眸がぎらぎらと輝いていた。そして、その体は今こうしている時も、ぼたぼたと溶けている。一軒家の屋根に無機的な白い色が滴った。

「ぎ、ぎぎぎ……」

それは声のようなものを発した。口がないのにどこから発したのだろう、などと考えるような余裕は春彼になかった。爛々と輝いた赤い瞳は春彼を捉え、獲物を目の前にした獣のように逃がすまいとしている。逃げなければ、と春彼は思った。これは危険だ。走って今すぐに逃げる、と本能と理性が叫ぶ。しかし、まだ痛みは頭に居座り、春彼の体をその場に縛り付ける。走って逃げることは不可能だった。

「ぎぎぎっ！」

それは鋭く声を上げると屋根から道路へと、春彼の目の前へと跳躍した。その反動で、ぼたぼたぼたと体の一部が黒い道路に滴り、異質な白い水溜まりを作る。

「は、はは……」

渴いた笑いが春彼の口から漏れた。そうだ、これは夢なんだ、と思った。恐らく疲れたからスーパーには行かず、家でうたた寝をしているのだ。夢は時として現実と見分けがつかないほど現実味に溢れている時がある。これもその一つなんだ、と春彼は目の前にいる奇妙な悪夢の登場生物を見つめた。

「ぎぎ、ぎ……」

それは唸りながら自らの前足を変化させていく。蜘蛛の足のようにだったそれはぐにゃぐにゃとうねり、足の先が鎌のようになった。無機質な白い刃がぎり、と煌めく。春彼は全身に鳥肌が立つのを感じた。刺々しい空気が春彼を包囲している。それは殺意だった。こ

れは自分を殺すつもりなのだ、と春彼は理解する。目的は分からないがあれは前足の刃で自分を貫くつもりなのだ、と思った。しかし、恐怖心はなかった。何故ならこれは夢なのだ。貫かれる直前か貫かれた瞬間に目が覚めるだろう。

「ぎぎぎぎぎつ！」

それは鎌のような前足を振り上げた。光を反射し、刃がざらりと輝く。春彼は夢だとしても衝撃を予想して反射的に腕を盾のようにして、きつく目を閉じた。その時、頭が後頭部を鈍器で殴られたように痛んだ。

「うあ……っ」

突然起こった激痛に春彼はよろけ、ふらりと数歩後ずさった。その瞬間、それは刃を振り下ろす。一瞬、春彼の腕に熱が走った。

「っ……っ」

春彼は恐る恐る盾にした腕を見た。制服が避け、血が滲んでいる。幸い、傷は浅いようだ。春彼は夢から覚めたような心地で目の前のものを見つめた。これが現実だと突きつけられた心は瞬く間に恐怖で満たされていく。

「ぎい……。ぎぎ……っ」

それは低く唸った。獲物に逃げられた憤りに目の輝きが更に鋭くなる。春彼は恐怖心から無意識に後ずさった。すると、靴の踵が固いものにぶつかる。がしゃんっ、という耳障りな音がした。背後にフエンスがあると気付いた瞬間、春彼は足の力が抜けていくのを感じ、

その場に崩れ落ちた。文字通り、後がない状況に逃げられないという現実がじわじわと思考に広がっていく。今朝、この道を通ったときはこんなことになるなんて思ってもみなかっただろう。

絶望する春彼の目の前でそれは自らの左前足を春彼を切り裂く凶器へと作り変えていった。ミシミシと音をたてながら太さは丸太のようになり、鎌のような刃は斧のような、その体には不釣り合いな刃に姿を変えていく。ああ、殺されるんだ、と感覚が麻痺した頭で春彼はそう思った。その刃は春彼の肉を裂き、骨を砕くための凶器だ。

（死にたく、ない……っ）

春彼は目前に迫った死に泣きたいような気持ちで願った。刃が振り上げられる。

「か、い……っ。ちな、っ……っ。あ、きら……っ。母、さん……っ」

思うように動かない口で春彼は家族と親友の名前を呟いた。ここで死ねば、もう二度と会うことは出来ない大切な家族の顔が思い浮かぶ。それは春彼の胸を締め付けた。そして、それは強い願望へと変わる。春彼はただ生き延びることだけを強く願った。

（死にたくない……！ 死にたくない！）

死への恐怖に涙腺が緩み、視界が微かにぼやけた。まぶたに浮かんだ涙を溢すまいと春彼は歯を食い縛り、目の前の白い死神を睨み付ける。

（なんで殺されなきゃならない！ 俺は、こんなところで死ねない

！ 死にたくないんだ！

頭痛が締め付けるような痛みに変わる。それは春彼の脳を万力でぎりぎり締め付けているように強い痛みだった。春彼は痛みにつう、と低く喉の奥で唸る。

（死にたくない！ 誰かつ、誰か助けてくれ……！）

今、この命を助けてくれるのなら神でも仏でも悪魔でも何でも構わないと思った。そんな春彼を嘲笑うようにそれは喉を鳴らす。そして、その赤い双眸で春彼を一瞥すると刃を振り上げる仕草を見せた。無慈悲な赤い目を見上げながら春彼は強く思った。

（誰か……っ！）

ざらり、と刃が煌めき、その眩しさとこれから訪れるであろう苦痛と死への恐怖に春彼は目をきつく閉ざし、顔を背け、身を強ばらせる。その瞬間、ピーーツと空を裂くような鋭く、かん高い音が響き渡った。そして、次の瞬間には一陣の風が春彼の体を包んだ。久々に感じた風が春彼の体の硬直を解いていくようで、春彼は目を開き、背けていた顔を上げた。

「ぎぎぎっ！ ぎぎ！」

白いそれは突然現れた介入者を捉えようと宙に向けて刃を振り上げる。しかし、介入者はその刃をひらりひらりと舞うようにかわした。茶色の羽根と焦げ茶の羽根が混ざった、森の中ならば溶け込んでしまいそうな羽毛とあごから腹にかけては純白の羽毛を持った猛禽類、鷹のような姿をした介入者は漆黒の双眸で敵を捉え、ひらりと天高く舞い上がると、矢のような速さで舞い戻り、その鋭い足の

爪で白い半液体の体を引き千切った。

「ぎいつ！　ぎぎぎつ！」

それは体を引き千切られた痛みに唸り声を上げながらも介入者を捉えようとする。今なら逃げられる、と春彼は思った。しかし、思うように体が動かない。頭痛は小康状態ではあるが未だに収まっていない。

（逃げないと、また……っ）

あれはまた自分を狙うかもしれない。春彼がそう思ったその時、パアンツと何かが破裂するような音が弾けた。それと同時にその体が春彼から見て左へ、何かに押し飛ばされる。春彼は音のした方をゆっくりと見た。今度は何が現れるのだろう、という恐れが体の動きを固くする。

春彼から見て右手、住宅街の入り口付近に立っていたのは一人の少女だった。服装は赤いチェック柄のスカートに黒い長袖、腰には茶色いウエストポーチを巻き、ブーツをはいたどこにでも居そうな少女だ。年齢は春彼と同じくらいだろう。しかし、その手には不似合いなものが握られていた。少女は右手に左手を添え、引き金を引く。その瞬間、再び銃声が鳴り響いた。

（噓、だろ……っ。あれって……！）

春彼は啞然として少女を、少女の手に見ているものを見つめた。凜とした表情でその少女は黒い拳銃を構えている。その銃口は真っ直ぐ標的へ向けられていた。そして、きつく標的を睨み付けていた目がちらりと春彼を見た。

「逃げてください！ 早く！」

春彼に目を合わせ、少女は叫んだ。その時、春彼の背後でそれが唸る。春彼はハッとして振り向いた。その瞬間、赤い双眸と視線がぶつかる。半液体状の体がどくん、と波打った。

（やられる……っ！）

春彼がそう直感したのと同時に鷹のような鳥が甲高く鳴いた。そして、再びその爪で応戦する。白いそれは体の一部を細くしなやかな鞭に創り変え、ひゅんつと宙を裂くように振るった。白い鞭は介入者を捕らえ、コンクリートに叩きつける。

「詩音さん！」

いつの間にか春彼の前に立った少女は悲痛な叫びを上げた。シオンサン？ 誰だ、という疑問が春彼の脳裏をよぎるが今はそれどころではない。何とか逃げようと立ち上がるうとするが、やはり頭痛がそれを阻む。

「う……っ」

ぐらりと揺れる重い頭を左手で支えた。コンクリートに冷や汗が滴る。平衡感覚がおかしくなり、春彼は電信柱に重い体を預けた。体の感覚がおかしい、と春彼は思った。五感が痺れ、頭痛と恐怖だけが増していく。その時、痺れ始めた聴覚に二回の銃声が聴こえた。

春彼は何とか銃声のした方を向く。コンクリートに叩きつけられたはずの鳥は再び宙を舞っていた。白い鞭を素早くかわし、茶色い矢のように本体へと接近していく。そして、足の爪でその体を捕らえた。どんなに抵抗されてもけして離さず、がっしりと半液体状の

体を掴み、反撃を受けるより早く空へと羽ばたく。少女はそれに向けて標準を合わせた。目算、地上5mのところで鳥はそれを解放した。それは即座に反撃と言わんばかりに鞭を振るう。しかし、鳥はひらりとそれをかわし、天高く舞い上がった。そして次の瞬間、パアンツと銃声が響き、放たれた弾丸が白い体を通する。その鞭と体は重力にもてあそばれるがままコンクリートに落ち、ぱしゃんと音を立てた。白い体は落下地点に飛び散りながら巨大な白い水溜まりを作る。少女はそれを冷静な表情で見下ろすと、安堵の表情をみせ、腕を空へと掲げた。すると空からあの鳥が舞い降りてくる。少女は腕に鳥を止まらせ、

「後は私に任せて、詩音さんは先に戻ってください」

と言った。鳥は少女の目を見て、頷くような仕草を見せると翼を広げ、再び空へと舞い上がる。やはり、シオンサンとはあの鳥のことかと思った後、春彼はハツとした。頭痛が引いている。思考も何とか巡らせることが出来ている。体はまだ重く、立つのは一苦労だろうが、どうにか動かすことは出来そうだ。春彼はようやく戻ってきた感覚に安堵のため息を吐いた。その時、腕がじく、と痛み、ああ怪我をしていたんだと思い出す。そつと腕を見ると制服の袖が裂け、腕にはそこまで深くないが血の滲んだ一本の細い傷口があった。この程度なら家に帰って消毒をして、包帯が何かで傷口を塞げば大丈夫だろう、と春彼は安堵した。そして、ふと視界の角に白い水溜まりが見えた。その瞬間、先程までの出来事が脳裏によぎる。

（なんだっただ、あれは……）

何もかもが謎だった。存在自体も、春彼を襲った理由も、その目的も、何も分からない。唯一分かるのは助かったということだけだ。

「えっと、あの……」

ふいにかけられた声に春彼はしゃがみこんだまま、目の前に立つ声の主を見上げた。春彼の目にどこか戸惑った様子で弱々しく微笑を浮かべる少女が映る。先程までの気迫が嘘のようだ。春彼は思わず少女を上から下まで一瞥した。雰囲気がまるで違う。本当に同一人物かと疑いたくなるほどにその身に纏う空気が違った。先程まで戦っていた少女からは何か強い意思のようなものが感じとれたが、目の前に立っている少女は見るからに気弱そうで春彼の疑いの視線を受け、やや萎縮している。手に握られたままの黒い拳銃が唯一、彼女が先程まであの白いものと戦っていた少女である証明だった。

「その……、大丈夫ですか？」

恐る恐るといった様子で少女が訊ねる。春彼はぐったりとした仕草で少女を見上げた。元来、愛想が良い方ではなく、更に心に余裕のない今の状況下で春彼は他人に気を配るようなことは出来なかった。

「……に、見える？」

春彼の無遠慮で辛辣な一言に少女は更に萎縮した様子で、

「そ、そんな訳ないですよ……。怪我もしてるし……」

と言って、拳銃をウエストポーチにしまつとスカートのポケットから白いハンカチを取り出した。

「とりあえず、止血しないと……」

そう言つて少女はコンクリートに膝を付き、春彼の腕にハンカチを巻こうと手を伸ばす。春彼はそれに対して抵抗感も何もなく、無関心だった。ただ、その視線と興味は異質な白い水溜まりだけに向いている。

（アレ、はなんだつたんだ……？）

答えの出ない疑問が再び春彼の脳裏をよぎったその時、ほんの微かに蚊に刺された程度の微弱さの違和感が春彼の中に生まれた。そして、それは瞬く間に急成長を果たし研ぎ澄まされた痛みとなって春彼の頭を貫く。

「うあ……っ！」

痛みにつめく春彼の目に飛び込んだのは悪夢だった。水溜まりがぶるぶると震え、その体を再構築していく。それはあつという間のできごとで少女が振り向き、その存在に気付いた時はすでにそれは春彼めがけて走り出していた。少女が拳銃を取り出すより先にそれは春彼の命を奪うだろう。

「あ、あああ……っ」

再び顕現した恐怖に春彼は悲鳴を上げること出来ず、口から漏れ出したのはただ震えるだけの声だった。助けを呼ぶことも、慈悲を乞うことすらままならない。それほどの恐怖が春彼に迫る。そして、次の瞬間。春彼の中で最高潮に達した恐怖は春彼の中で弾けた。その衝撃が言葉となって春彼の喉元までせり上がってくる。

「来、るな……」

その言葉を小さく呟くと春彼の体全体が脈打つような不思議な感覚に包まれた。まるで、春彼の中で何かが目覚めようとしている、目覚める時を待っているかのようだ。その決定権は春彼にある。誰から教わるでもなく、春彼はそう感じとっていた。白い体がコンクリートを蹴り、跳躍する。少女が拳銃を構え、標準を合わせる。その瞬間、春彼は叫んでいた。

「来るなあーっ！」

その言葉を引き金に頭痛が春彼の中で爆発した。五感の全てが痛覚に変わったかのような痛みが春彼の意識を失わせる勢いで襲い来る。春彼はその痛みにきつく目を閉じ、水に揚げられた魚のように口を動かすことしか出来なかった。この痛みがああ白い悪夢によるものなのか、なんなのかは春彼には分からなかった。

「これ、は……」

少女の呟く声に春彼は痛みにながらうつすらと目を開いた。座り込み、呆然とした様子で何かを見つめる少女が視界に入る。その隅にはゆらゆらと揺れる金色の光が輝いていた。春彼はゆっくりと目をしっかりと開き、その光の源に目をやる。そこには春彼の常識では信じられない光景が広がっていた。縦に長い楕円形の形をした金色の光の膜の中に白いそれは捕らえられていた。その光の膜の外では白く輝く光の鎖が浮いている。待っている。春彼はそう感じた。何かの目覚めの決定権が春彼に委ねられたように、この金色の膜と白く輝く光の鎖は春彼が何かの決定を下すのを待っている。春彼はじっとそれを見つめた。様々な想いが春彼の中を駆け巡る。これをどうすべきか。そんな疑問が思い浮かんだ。

（どうもこうも、コイツは……っ）

春彼の中で答えが生まれた瞬間、頭痛が更なる爆発を起こした。呼吸さえも止めかねない痛みで春彼は体を支えきることが出来ず、その場に倒れこむ。しかし、それは一瞬のことだった。

「あ……っ。し、しつかり！ 大丈夫！？」

少女の声に答える余裕もなく、春彼は荒い呼吸で虚空を見つめる。身体中から吹き出す汗が地面に流れ落ちていく。一体、何がどうなつたんだ、と春彼は肘を付いて体を起こし、視線を光の膜の方へ向けた。少女も同じ方向を見る。そして、呟くように言った。

「たつた、一撃で……」

春彼は目を見開き、それを見つめていた。そこにはもうすでに光の膜はなく、白い、灰か塵のようなものが一山あるだけでその山も瞬く間に風に流れて消えていく。春彼は呆然とその様子を眺めていた。

「あ、えっと。立てますか？」

そう気遣うような少女の声に春彼はハッとして体を起こした。しかし、急に動いたせいか起こしたばかりの体が今度は反対側に倒れそうになる。春彼は何とか手を付いて体を支えようと片手でフェンスを掴み、立ち上がった。その様子を心配そうに少女は見つめている。

「あ、あのっ。無理はしないで下さい。その、能力が覚醒したばかりで体力の消耗が激しいはずですから……っ」

春彼は一瞬、少女を見た。能力、訳スキルの分からない単語について質問すべきなのだろうが、春彼にそんな気力はない。少女から視線を外し、白い山があった場所をみると山は完全に姿を消していた。

「あの怪物を倒したのは、あなたの力です」

春彼の隣でそう口を開いた少女を春彼は凝視した。少女は深刻な表情で春彼を見つめ返し、ふと微かにうつ向いた。

「力に目覚めた所有者オーナーを奴等は放っておかない……」

奴等、という言葉があの白いものを指していることくらいは春彼にも分かった。そして、”力に目覚めた所有者オーナー”という言葉が自分を指していることも理解できたが、それ以上の理解は春彼の奥底にある意識が阻んだ。日常が、春彼の守るべきものが崩壊していくと直感が告げている。その瞬間、春彼は地面のバグを広い、肩にかけた。

「あの、私は……」

少女が口を開いた瞬間、春彼は走り出した。体力が底をついた体を引きずるように走る。身体中が重く、息をするのが辛い。まるで水の中を走っているようだ。それでも春彼は立ち止まらなかった。このままでは日常が崩壊する。その危機感が春彼の体を動かした。

「あ、待って！ 待ってください！」

少女の制止も聴かず、ただがむしやりに、逃げるように春彼はその場を去っていく。少女はその背を追って走り出そうとした。その瞬間、ウエストポーチの中から振動音が響いた。少女はハッとして立

ち止まり、走り去る春彼の背中とウエストポーチを交互に見る。そして、春彼に背を向けるとウエストポーチから白い携帯電話を取り出した。画面を開き、着信の相手を確認すると急いで通話ボタンを押し、スピーカーを耳に当てる。

「もしもし。……はい。確かに所有者^{オーナー}です。能力^{スキル}の発動も確認しました。……あ、それがその……、逃げられてしまつて……。えっと、学生です。多分、制服からして潜入先の生徒だと思えます。……はい。分かりました」

少女はそう答え、相手が電話を切るのを待つて通話を終了した。そして、春彼が走り去つた方を振り向く。誰もいない道を見つめ、それから手にした拳銃に目をやった。

「私が、怖がらせちゃつたせいもあるのかな……」

そう呟いて携帯電話と拳銃を順にウエストポーチへと仕舞う。重みの増したウエストポーチがまるで自分の心を写し出しているような気がした。少女はすつと目を閉じて、その場に立ち尽くす。そして、目を開いた少女の顔には決意の表情が浮かんでいた。

「……奴等が動き出す」

まるで何かの始まりを告げるようなその言葉は静寂の中で凜と響いた。

痛みが告げるもの（後書き）

十年間苦楽を共にしたパソコンさんのご臨終により更新が遅れてしまいました。

これからは二代目パソコンさんと共に頑張っていきたいと思います。

風音 柚姫

第三話 風音 柚姫

春彼は息を切らせ、一目散に家路を辿っていた。体力の限界を恐怖がいとも簡単に凌駕し、体が疲れ果てているのも忘れて走り続けた。公園の中を突っ切り、閑静な住宅街を駆け抜け、三つ目の角を右に曲がる。その突き当たりの民家が村主家だ。

「……っはあっ！ はあっ、はあ……っ」

自宅の前に辿り着いて、春彼はようやく足を止めた。肩を上下させ、荒い呼吸で酸素を吸い込み、肺に送る。その時、春彼は右腕が何か伝うむず痒い感覚を感じた。見れば傷口から血が垂れ、その滴がコンクリートの道路に落ちていく。青みがかった黒のコンクリートの道路に小さな赤い染みが出来た。その染みを何をするでも、考えるでもなくぼんやりと見下ろしていると疲れで感じなかったジクジクとした痛みがあるのに春彼は気付き、その傷に視線を移す。自身の腕に確かに刻まれた傷をジッと見つめると、それは先程の悪夢が現実のものだと春彼に知らしめるための刻印のように思えた。そう思った瞬間、先ほどまでの光景が走馬灯のように頭の中を駆け巡り、春彼は舞い戻ってきた恐怖と悪寒に思わず顔をしかめた。全身から冷や汗が流れる。

（俺、死んでたかもしれないんだ……）

そう思うと足がすくみそうになる程の恐怖を感じた。思い返せば恐

怖が蘇るだけだ、と春彼はその恐怖と記憶を心の奥に封じ込める。
あれは関わってはいけないものだと思感が告げていた。

あの拳銃を手にしていた少女の言葉。能力^{スキル}、怪物を倒した春彼の力、
力に目覚めた所有者から推測すると怪物を倒した春彼の力が能力^{スキル}と
いうもので力に目覚めた所有者とは春彼を指しているのだろう。し
かし、それ以上のことは春彼には分からなかった。そもそも理解す
る気もなかった。知ってしまったえば春彼の日常の崩壊は免れないだろ
う。それは春彼が最も恐れることだ。

父親を失った時のあの胸に大穴をうがたれたような感覚。憔悴した
母、泣き続ける妹、それをなだめ続けながら、不安を隠しきれず暗
い表情の弟。それを見ていた自分はどんな顔をしていたのだろう。
春彼はじつと我が家を見つめた。帰ってこれたという安心感が体を
包み込む。

「……買い物、行っていないな」

そう呟いてから春彼は自分の台詞の暢気さに少し笑った。

自分は帰ってきたのだ。それだけのことだと思しながら春彼はズボ
ンのポケットから鍵を取り出し、扉を開いた。すると玄関には靴が
一つもなかった。恐らく母親は出版社に行き、弟と妹はまだ帰って
いないのだろう。これは好都合だと思いながら春彼は腕の血が垂れ
ないように気を配りながら靴を脱ぎ、バッグを玄関マットの上に置
くと一階の洗面所に直行した。

何とかフローリングの廊下に血の滴を落とすことなく洗面台の前に
立ち、春彼は右腕の裾をまくる。腕にはすっぱりと切られた細い切
り傷が一筋、縦に入っていた。春彼は水道を捻り、水を出すと流れ
落ちる水の中へ腕を突っ込んだ。微かに染みるが大した深さではな
いことが唯一の救いだ。これなら思いの外早く治るだろう。春彼は
そう思っ水から腕を引き、さっとタオルで水を拭くとリビングに
向かおうと廊下に出た。その時、がちゃと鍵が回る音がして、玄関

の扉が開く。まずい、と小さく呟き、春彼は咄嗟に傷を負った腕を自分の後ろに隠した。

「ただいまー。あ、兄ちゃん。早いね」

帰宅した秋良はそう人懐っこく笑った。春彼は心臓の脈打つ早さが増しているのを必死に隠しながら何とか笑顔で

「ああ。おかえり」

と返す。そして心の中で、よりもよって秋良かと呟いた。

兄の目から見て、昔から秋良は人一倍他人の痛みに敏感だ。母親が風邪で倒れた時も、智夏が自転車で転び、怪我をした時も当の本人より辛そうにしていた。その秋良が今の春彼の傷を見たらとても辛そうな顔をしてどうしたのかと聞くだろう。春彼はそんな心配をこの出来すぎた弟にかけたくないと思った。何より、説明のしようがない。

しかし、秋良は目敏く、兄の様子がおかしいことを見逃さなかった。

「兄ちゃん？　どうかしたの、そっちの手」

そう言つて秋良は靴を脱ぐと素早く春彼の元へ駆け寄り、春彼の背後を覗き込んだ。春彼は無駄な抵抗はせず、参ったなと苦い顔を作る。智夏相手ならごまかせたかも知れないが、秋良相手には無理なようだ。

「……どうしたの、これ」

眉間にしわを寄せ、秋良は春彼を見上げた。その顔はまるで自分が傷を追い、その痛みに耐えているかのようだった。あまりにも予想

通りの展開に春彼は

（お前がそんな顔することないんだ）

と心の中で語りかけるように呟き、苦々しい想いを噛み締めた。そして傷を隠すように手を添えて、

「ちょっと帰り道で、な」

と言って曖昧に濁すように笑った。そんな兄の様子に秋良は更に眉間のしわを深くする。春彼は困ったように笑い、ぼん、とその頭に手を置いた。

「平気だから。心配するな」

心配症の弟を安心させるように春彼は優しさのこもった声音で言い、手をどける。その言葉に秋良はまだ納得しかねているという顔だったが渋々引き下がるように、

「分かった」

と言い、いつものように人懐っこい笑みを浮かべた。

「兄ちゃん。おやつ」

弟の笑顔に春彼は安堵すると今度は心からの柔らかく、自然な笑顔で

「ああ。冷蔵庫にプリンがあるからそれな」

と答えた。その答えに秋良は、

「わーいっ」

と言って嬉しそうに笑う。そんな秋良に吊られるようにして春彼も笑みを深くした。

「荷物降ろして手、洗ってこいよ。用意しておくから」

「うん」

兄の言葉にそう答えて秋良は小走りに踵を返し、とたとたとたと階段を駆け上がる。春彼はそれを見送るとリビングのドアノブを回した。

がらんとしたリビングでふう、と息を吐き、棚に収められた救急箱に目をやる。あのやんちゃな妹ですらこれを使う機会はめっきり減った。ちよっとしたかすり傷は未だに多いが救急箱を使わなければならない傷はほとんどなかったのだ。それをまさか自分が使うことになるとは思ってもみなかった。そう思いながら春彼は棚から救急箱を降ろし、その場にしゃがみこむと中から包帯とテープを取り出した。そして、手早く包帯を傷口に巻き付け、テープで固定する。

（まあ、こんなものか）

軽く腕を動かし、はずれはしないかと確認してから春彼は立ち上がり、救急箱を棚に戻した。

それから、そのままキッチンに向かい、冷蔵庫から市販のプリンを取り出す。それをカウンターに置くとスプーンを引き出しから取り出した。その時、リビングのドアが開き、秋良が部屋に入ってくる。

「兄ちゃん、おやつおやつ」

そう言って催促する弟を微笑ましく思いながら春彼は、

「ああ。カウンターに出してあるぞ」

と言った。秋良はカウンターに置かれたプリンを見て、少しだけ唇を尖らせる。

「兄ちゃんが作ったプリンかと思った」

「いや、作ってる暇なかっただろ」

春彼がそう言っていると秋良はプリンとスプーンをテーブルに運び、席についた。そして、そこから春彼のいるキッチンへ振り向き、

「じゃあ、今度作って。たまには兄ちゃんが作ったおやつがいいな」

と笑う。うまいこと人に物を頼むな、と天然小悪魔な弟に春彼は思わず感心した。春彼が気まぐれで弟と妹のおやつを作った回数は去年一年間でも両手で数えられる程度、今年は一回か二回しか作っていないはずだがそれでもまた作ってほしいといわれると

「今度、暇があつたらな」

春彼がそう答えると秋良は満足した様子で前を向き、

「いただきますっ」

と言ってプリンを食べ始める。穏やかな沈黙がリビングを満たしていく。ああ、平和だな、と春彼が心の中でしみじみと呟いた時、玄

関で鍵が回り、ドアが開く音がした。

「ただいまー！ あ、アニキと秋良かえってきてる。アーニキー！
おーやーっー！」

まるで台風がやって来たかのように賑やかになる。先程までの穏やかさは太陽に照らされた霞のように消えてしまった。どたどたとたと廊下を有り余る元気で走り、リビングに飛び込んだ台風、もとい智夏は一つ上の兄弟が自分の好物を食べているのを見て、

「あ、秋良プリン食べてる！ アニキ、あたしのは！？」

と騒がしくプリンの催促をし始める。そんな妹に春彼は苦笑しつつ、

「はいはい、ちょっと待て」

となだめながら平穏な日常にあの悪夢のことを忘れ始めていた。

（そうだ。あんなことが現実になり得るはずがない……）

春彼はそう心の中で呟きながら冷蔵庫の取っ手に手をかける。早く用意しなければ秋良のおやつに手を出しかねない。そんなことを考えながら、春彼はプリンを手に取った。

翌朝、春彼はいつも通りの時間にいつもと変わらない様子で通学路を歩いていった。しかし、その服装はいつもと違う。下は制服だが上は白いシャツを着ているだけだ。

母親には裂けた制服について「破れたフェンスに引っ搔けてしまっ

た」と説明した。少しは怪しまれるだろうかと思っていた春彼だったが母親はあっさりその理由に納得し、

「あっそ。なら新しいの買うか」

と言っていた。そんなにも簡単に納得していいのか、と心の中で春彼は思わずツツコミを入れたがよく考えれば昔から自分の母親はそんなものだった。何より怪しまれないのは春彼にとって都合がいい。

そして次に、買い物に行き忘れた、という旨を家族に伝えた。食欲旺盛な弟と妹よりも更に食欲旺盛な母親からのブーイングは避けられまい、と覚悟していた春彼だったがその予想に反した叫びが村主家に響き渡った。

「はああーっ!? 春彼が、春彼が買い物に行き忘れた!? あんた、ほんとに春彼!? …… うん、本物ね。じゃあ何!? 天変地異の前触れ!? 明日は槍が降るの!?!」

「だってアニキ、今日とくばい日だったんでしょ!? どーしたのっ!? アニキがとくばい日わすれちゃうなんて! だいじょうぶ!?!」

「兄ちゃん、疲れてるの? それとも悩みことがあるの? ぼくにできること、ある?」

と言った具合でしばらく春彼は家族をなだめるのに必死だった。春彼としては家族がそこまで自分に対して買い物忘れるのは珍しいことという認識を持っていたのは意外だった。それでもよく買い忘れをする方だと自分では思っている。ただ、買い忘れてもあるものでカバーすれば事足りるのでそこまで騒いだことはないだけだ。

とりあえず替えの制服が届くまでは白いシャツに制服のズボンで通学することとなり、春彼はいつも通りに歩いていった。

「はーるーかー！」

いつものように背後から聞こえる海の声に春彼は立ち止まり、振り向いた。海はいつも通り上下共に制服で自転車に跨がり、春彼に追いつくとその隣で自転車からひらりと降りる。そして、驚いた様子で首をかしげた。

「よつ。どーしたんだよ、そのカッコ」

「ん、ああ。ちょっと破けててな、制服」

春彼は歩きながらそう答える。すると海は自転車を引き、春彼の隣を歩きながら訝しげに眉間にしわを寄せた。

「破れててつて、どうしたんだよ。なんかあったのか？」

「なんかあったってほどでもない。ただ、ちょっと制服の袖を破れたフェンスに引っ搔けただけだ」

「なーんだ。心配して損したじゃねーか」

春彼の答えに海はあっけらかんと笑う。吊られるようにして春彼も笑った。そして、自分がいつも通り、自然に笑っていることに気付く。今日も何事もない一日が始まるんだ。そう考えると春彼の笑みは更に深くなった。

「……は、春彼ー？ どーした、そんなににやにやして。やっぱ調

子悪いのかっ？」

海はそう心配そうに春彼の顔を覗き込む。春彼は心配してくれるのはありがたいが心配の仕方がひどいなと思い、やれやれと肩をすくめた。この幼馴染はこういったことを悪意なく、天然で口にする。それは昔から変わらないことで、そのために何度母親の逆鱗に触れたかわからない。そして、いつも自分はそんな幼馴染へ反撃に出る。昔から変わらない関係だ。春彼は少し考えると丁度いい反撃手段を思いついた。それからやり、と意地悪く笑い、反撃を口にする。

「いや、なんでもない。それよりお前は大丈夫なのか？ 数学の先生、今日お前のこと当てるって予告してただろ」

その春彼の一言に海はサアツと顔色を変えた。顔に分かりやすく、忘れてましたと書いてある。あまりにも単純な友人の反応に春彼は腹を抱えて笑い出しそうなのを押し殺し、喉を鳴らして、くくくつと笑い、

「大丈夫か、海？ 調子悪いのか？」

と聞いた。海はがつくりと肩を落としながらさがるような視線を春彼に向ける。またもや分かりやすく、顔に助けてくれ！ と書いてあった。

「はーるーかー。助けてくれえ……。オレ、昨日もダルくてさあ……！」

そう主張する海に春彼はやや驚く。この体力の体の丈夫さに関して折紙付きの幼馴染みが体の不調を連日訴えるのはかなり珍しいことだ。

「まだ本調子じゃないのか」

春彼がそう意外そうな口ぶりで言う。海はうーん、と唸って軽く首をかしげた。その様子からはあまり体調が悪いようには見えない。しかし海は眉間にしわを寄せ、渋面を作っている。

「うーん。疲れはためないようにしてるけどなあ。でも、何か体が重いー」

そう海は苦い顔で呟くように言う。そこから一転、にひひ、と弱々しげながら何か企むような笑みを浮かべ、春彼を見た。その意図を汲んだ春彼はすっと目を伏せ、ふうつと短いため息をつく。

「……まあ、事情が事情だな」

「だろ！？ だから……！」

ノートを寄越せと催促の手を伸ばす海を春彼はちらりと見てから、その手を握り返し、軽く上下に振った。俗にいう握手というものだ。

「おー。これからもよろしくなー……って違う！ ノートだよ、ノート！ 助けてくれよ、春彼ーっ」

途中まで乗っていた海はそう言ってバタバタと手の平を振り催促する。春彼はやれやれとため息を吐き、首をすくめた。春彼は時々考える。この勉強が苦手な幼馴染みを自分は甘やかしすぎたのかもしれないと。少しは自分で考えさせなければ彼の学力の低下は加速する一方だろう。

「海。お前、少しは頭使わないと脳みそ全部蒸発して筋肉だけになるぞ」

幼馴染みの学力を心配しつつ春彼はそう、しれっとした口調でとてもないことを口にした。実際にはありえないことだが海は、

「うえっ！？ の、脳みそって蒸発すんのかっ？」

と目を見開いてわざとらしくおどけた顔をしてみせる。しかし次に、にじりと笑ってみせた。

「なーんてな。流石のオレもそれくらい知ってるぜー？」

「まあ、あんまり使わないと頭って退化するらしいけどな。……そういうことで、解き方だけは教えてやるよ」

春彼がそう言うとき海はえーっ！ と思いきり批難の声を上げた。春彼は呆れ顔で海を見る。それから、海の顔の前で右手の指を二本立てた。

「予備知識なしのぶつつけ本番と予備知識ありの本番。どっちがいい？」

「う、うう……っ。予習の方、よろしくお願いシマス……」

そう言って項垂れる海に春彼は威厳たつぷりに頷き、そしてふっと微笑んだ。五月半ばの空は青く、日差しは暖かで穏やかな風が吹く。あまりにも平穏すぎる日常に春彼の記憶から昨日の悪夢はきれいに忘れ去られていた。

部活のことで職員室によるという海と別れ、春彼は教室で席に着き、がやがやと教室に話し声や笑い声が溢れる中、ぼんやりとしていた。窓の外の景色、教室の雰囲気。その何もかもが当たり前の日常の空気を生みだし、春彼を包んでいた。その最中、のんびりとした雰囲気に波紋を立てるように

「はーるかーっ！」

と教室に駆け込むなり海が大声で春彼を呼んだ。一瞬にして、ざわめいていた教室がぎょっとして水を打ったように静まり、クラス中の視線が教室の後ろの入り口で立ち尽くした海に集中する。しかし、声の主が海だと分かると、

「なんだ、藤村か」

「朝から元気でうるさいねー」

「はよーっす」

と各々に反応を返す。海が騒がしいのはクラスメイトたちにとってもいつものことなのだ。海はクラスメイトたちと口々に挨拶を交わしながら窓際の列の中間に座る春彼を目指して進んでくる。クラスメイトの言葉一つ一つに笑い、驚き、おどけるなど相応しい反応を返しているその様子だけで海がどんなに社交的で友人が多いかが見てとれた。

小学生だった春彼は自分にはないその社交性に憧れたこともあったが今はもう違う。ないものねだりをしていても仕方がない。それに春彼が海に憧れていたように海も春彼に憧れていたのだ。自分の憧

れる海が自分に憧れていたという事実は春彼の胸に強く響いた。そして、それがきっかけで自分は自分だと思えるようになった。

そんなことを思い出しながら春彼は海がクラスメイトたちとの挨拶を捌ききるのを眺めていた。海は見事に挨拶を捌ききると荷物も置かずに春彼の前に立ち、ふっふっふと謎の笑みを浮かべた。春彼は席についたままそれを訝しげに見上げる。

「どうした、海？ 本当に脳みそ全部蒸発したのか？」

「え、初っぱなからひでえ！ 違うつて！ ニュースだよ、ニュース！ ビッグニュース！ まず一番に春彼に教えてやろうと思ったんだよーっ」

そう言つて海はバシバシと春彼の机を叩く。その顔は興奮で紅潮し、目は幼い少年のようにキラキラと輝いている。歳不相応ながらそんな表情が似合つてしまうのは海の性格がなせる技だろう。そんな海とは対照的に落ち着き払った春彼は冷めた様子で幼馴染みを見た。

「海、落ち着け。深呼吸だ。ほら、吸つて吐く吸つて吐く。吐く吐く吐く」

「すーはーすーはー、はーはーっはあ……って！ 息出来ねえ！死ぬぞ、オレ！」

海の台詞に春彼はノリ突っ込みを繰り出す。そして、恨めしげに春彼を見た。しかし春彼はそんなものどこ吹く風といった様子で取り合わない。やがて、海はがくつと肩を落とし、ため息をついた。

「だめだあ……。春彼にや勝てる気がしねえ……」

「今更だな。で、なんかあったのか？」

春彼がそう聞くと海は落ち込んでいたのが嘘だったかのような早さで顔を上げ、

「転入生だ！」

と弾けんばかりの笑顔で言った。春彼は訳が分からず、幼馴染みの顔をまじまじと見つめる。恐らく、この五月の半ばという微妙な時期に転入生が来るということがニュースなのだろう。しかし、何故こんなにもテンションが高いのか分からない。

「転入生がどうしたんだ？」

春彼がそう疑問を口にするとう海はぐわつと目を見開いて、ばしばしと机を叩いた。

「来るんだよ！ 転入生が！ 女子が！」

「なんで女子って分かるんだよ」

「だって先生がさ、さん付けで呼んでたんだぜっ！？ 絶対女子だっつて！」

海が目をきらきらと輝かせる中、春彼はさっと辺りを見渡した。クラス男子は海と同じく目を輝かせ、事の詳細を聞き出そうとうずうずしているのが分かる。そして、女子は転入生という話題に反応しつつも男子の反応にやや呆れているようだ。春彼はやれやれと小さくため息をついた。

「海。そういう下心はしまっておけ」

「なんだよー。春彼はこーゆー話にも食いつかねえなあ」

「お前とは違うからな」

春彼の素っ気ない一言にも海は笑顔を絶やさず、にひひっと人懐っこく笑った。そんな海に春彼も思わず笑みを返す。そして、くいとあごでクラスの男子たちを示した。

「そのビックニユース。他のやつらにも教えてやれよ」

「おう！ あ、これで数学の件はチャラな！」

そう言っただけで海は満面の笑みで親指をグツと立てるとクラスの輪の中に飛び込んでいった。その後ろ姿に春彼は苦笑混じりにため息をつく。

（チャラって。全然釣り合っていないだろ。……まあ、いいけど）

そう心の中で呟いて春彼は窓の外に視線を戻した。

春彼が誰にも話しかけないのと同じようにクラスメイトたちは誰一人として春彼に話しかけない。それが春彼にとって一番いい状態だった。海という社交的な幼馴染みの存在もあり疎まれず、ただ春彼が接触を拒んでいるのを知って近づかないという春彼とクラスメイトの関係は春彼が傷付かずに家族を優先するために築いた関係性だ。友達も家族もなんてなかなか都合よくいくものではない。小学校生活後半の三年間で春彼はそう学んでいた。

友達は自分の境遇を理解してくれていると思っていた。遊びに誘われても家族を優先して断っていたが、それだけのことで彼らの反感

を買うとは思ってもみなかった。

「アイツ、付き合い悪いよな」

「買いモンに兄弟の世話に家の手伝いだって。老けてるよな」

「んなもん親にやらせりゃいいじゃん！ いい子ぶりやがってさあ」

友達だと思っていた存在から陰口を叩かれ、心臓を鷲掴みにされたように苦しくなった。呼吸は正常にしている。なのに息苦しくて仕方がない。

「お前ら！ 勝手なことばっか言うなよ！ 春彼は一生けん命なんだよ！ 一生けん命やってんだ！ なんにんでそんなこと言うんだよ！」

海の怒鳴り声がした。滅多に怒りをあらわにしない海が声を荒げている。その声を聞いた瞬間、息が楽になった。そして、理解した。大切なものを二つも抱えて歩くのは無理だ。一番のために二番は捨てなければならぬ。一番である家族のために二番の友達は捨てるなら、海はどうなるのだろう。海も切り捨てなければならぬのだろうか。そう考えるとまた息が苦しくなった。しかし、後日に海が言った一言に春彼はまた救われた。

「春彼。なんか手伝えることあったら言えよ！ 秋良と智夏の世話とか、おばさんを急かす係とか！」

その一言で春彼の中の一番は家族と幼馴染みになった。以来、春彼はその一番を優先して生きてきた。そして、今日にいたる。この最優先事項は小学校三年生から中学二年生の今にいたるまで一度とし

て変わらなかった。

春彼がぼんやりと追憶にふけっていると教室のドアが開き、クラスメイトたちが急いで席に着く。そのざわめきで春彼はハツとした。担任が教卓に立っている。さすがにもうぼんやりとはしていられない。

「全員席についたなー。ホームルーム始めるぞー」

そう言って担任はクラスを見渡し、満足げに頷いた。

「よし。全員いるな。しかも、その顔。さては……、藤村！ お前は口が軽いな！」

「しゃ、しゃーないじゃないツスカ！　しゃべんなっつーほうが無理ツスよ！」

海の反論に教室がドツと沸く。担任もアツハツハツと声を上げて笑った。そして、手をぱんぱんぱんつと三回叩き、教室内を静かにさせる。早く転入生を見たい生徒たちは通常の倍の早さで静かになった。そんな生徒たちに担任はにやりと笑う。

「さあて。それじゃあお楽しみの転入生の登場だ」

教室内が静けさを保ったまま、高揚した雰囲気 را 帯びた。クラス中の視線がドアに集中する。その最中、春彼はぼんやりと宙を見つめていた。担任が教室にいるのに窓の外を見ていては不味いが転入生には正直興味がない。どうせ関わらないのだ。なら誰が転入してこようと変わらない。春彼はぼんやりと今日の夕飯についての思考を巡らせていた。

（鯖の煮付けが食べたい気分だ……）

そんなことを考えていた時、教室がざわめいた。微かにささやく声が口々に

「……かわいい……」

「……レベル高……」

「……顔小さい……」

と感想を述べている。しかし、春彼にとっては一向にどうでもいいことだった。頭の中では鯖の煮付けのレシピと材料費が展開されている。

「よし、じゃあ全員注目！ 転入生の自己紹介だ！」

不意打ちのごとく鳴り響いた担任の大声に春彼はびくんと体を震わせ、背筋を伸ばした。一瞬にして今まで脳内で展開していた情報が崩れていく。ややうんざりとしながら春彼は教卓に目をやった。そして、その姿を捉えた瞬間、目を大きく見開く。肩より長く伸ばした色素の薄い髪に白い肌、黒い瞳。華奢な体格だがその体格で拳銃を手に入っていたことを春彼は知っている。

彼女は緊張した面持ちでクラスメイトに背を向けるとチョークを手に取り、腕を伸ばした。こつこつ、と黒板にチョークが当たる小気味よい音が響き、綺麗に整った字面で書かれたのは『風音^{かひね} 柚姫^{ゆずき}』という名前だ。そして彼女、風音柚姫はクラスメイトたちに向き直り、ぺこり、と一礼した。

「風音柚姫、です。これからよろしくお願いします」

その挨拶に教室内が拍手で沸く。しかし春彼にはこれが昨日の鬼気迫る声と同じものとは思えなかった。緊張でやや表情や声が固い季節外れの転入生と昨日の拳銃を手に使っていた少女が同一人物とは思えない。そう考えたところで春彼はハツとした。

（違う……！ 俺は何も知らないっ。彼女のことも！）

そう春彼が心の中で叫んだ時、教室を見渡していた彼女と目があつた。柚姫は驚いたように目を見開き、春彼を凝視している。春彼は直ぐ様、視線をそらした。まるで自分を知っているかのような反応に春彼は視線を伏せ、拳を握り、齒を食いしばる。腕の中の大切なものが崩れていきそんな予感を感じた。

（俺は、知らない……）

腕の中のものを失うまいときつく抱き締めるかのように春彼は心の中で呟いた。

風音 柚姫（後書き）

ずいぶんと更新が遅くなっていました……。

月一更新を目指していますがなかなか難しいものです。どうにもスランプから抜け出せません。

こんな月神ですがこれからも見守っていただけると幸いです。お読みいただきありがとうございます。

拉致

第四話 拉致

四時限目の前。春彼は自分の席で海に数学を教えながら浮き足だつた心を必死に押さえつけていた。背後ではクラスメイトたちが季節外れの転入生を質問攻めに行っているのが聞こえる。意識するな、聞くな、と何度自分に言い聞かせても春彼の耳はその会話を拾ってしまふ。動揺しきつた心は春彼の指示など聞き入れない。なんとも言えない居心地の悪さに春彼は目眩を感じていた。

「……春彼？ お前、ホントになんともないのか？ 具合悪そうだぞ、マジで」

海の言葉に春彼はうつ向いていた顔を上げる。海は眉間にしわを寄せ、春彼を見ていた。春彼は笑顔を作り、

「平気だよ。あとそこ。間違ってるぞ」

と言って問題をシャーペンで示した。海は驚いたように目を見開き、

「げ、マジか」

と問題を食い入るように見つめる。そして、うーんと唸った。どこが間違っているのか分からないようだ。

「なんでそこ、足し算じゃなくて掛け算になってるんだよ」

「あああつ！ マジだ！ やべえやべえ」

海はそう言っただけで急いでノートに消ゴムをかける。そして再びシャーペン走らせ、数式を構築し、解を導こうとしてペンが止まった。何故そこで分からなくなる、と春彼は数式を見下ろして思う。

（まあ、これくらいなら少し考えれば海でも……）

春彼はそう心の中で呟いてちらりと海を見た。すると海と目が合う。半笑いの顔でその視線は助けを求め、春彼を見つめていた。春彼は眉間にしわを寄せ、きつく目を閉じる。先程とは違う意味で目眩がしてきた。幼馴染みの学力の低下は春彼が思う以上に深刻だったらしい。ここは自力で解決させるのが正しい選択だと思われるが生憎と四時限目の開始時間まで五分もない。致し方ない、と春彼は口を開いた。

「……そこは代入だ。 〳 2Xを使え」

「あー、ここでコイツが活躍すんのかつ。なるほどなあ」

そう言っただけでしきりに感心しながら海は数式を解き進める。そして、ペンが止まった。期待に満ちた表情で海は答えを指差し、春彼を見る。春彼はやれやれと思いながら、

「正解」

と言った。その瞬間、海は勢い良く立ち上がり、

「いよっしやあああつ！」

と叫ぶ。得意満面でノートを掲げているその様に春彼は疲れの滲み出たため息を吐いた。実質その七割を春彼が解いたようなものだ。本当にこの幼馴染みの将来が不安でならない。しかし、その反面でこうしているといつも通りの日常にいると思うことが出来、途中から転入生への質問攻めは気にならなくなっていた。

「ああー、さっすが春彼だな！　ばっちし授業間に合ったしっ。サンキューなっ」

満面の笑みの海の言葉に春彼は

「ああ、よかったな」

と答えながら、心の中で

（こっちこそ助かった）

と呟くように思った。ただし、口に出すことは出来ない。気心知れた幼馴染みにさえ明かすことのできない秘密を抱えたことがひどく心苦しかった。

その時、ふと思い出したように海が口を開く。

「あ、そーいやさ。転入生の風音さんにお前のこと聞かれたんだけど、もしかして知り合いなのか？」

その瞬間、一瞬心臓が止まったかのような心地がした。能力、所有者、そんな言葉が脳裏をよぎる。そんな中、海は更に言葉を続けた。

「なんか最初っから春彼の名前知ってたし。あ、昨日会ったとかっ？」

まるで近辺を嗅ぎ回られているかの不快感が心の底から沸き上がった。彼女に対して名乗った覚えはない。しかし、彼女は自分の名前を知っているらしい。転入したてにも関わらず、名前を知られていることから想像できることは一つだった。

（調べた……。いや、でもなんでだ？）

理由が思い当たらない。そもそも初対面の相手の情報を半日程度で手に入れられるものなのだろうか。疑問ばかりが浮かぶが、それはさておき確かめなければならないと春彼は思った。

「いや……。覚えはないな。なあ、海。何聞かれたんだ？ あの転入生から」

「え？ えーと、昔のこととか？ どんなだったかー、とか。なんか変わったことはなかったかー、とか。あ、余計なことは喋ってねーからな！」

海の言葉に春彼は苦笑を浮かべ、

「分かってる」

と言った。確かに海の口は朝の転入生のニュースの件からして固くはないが本当に大切なことに関しては別だ。何があるうとも口外すべきでないと判断したことは絶対に言わない。

その時、教室内に四時限目の開始を告げるチャイムが鳴り響き、初老の数学教師が教壇に立った。

「あとはーって、やば！ 先生来たっ。後でな、春彼！」

そう言って口に出しかけていた言葉を呑み込み海は踵を返す。春彼はその背中から視線をそらし、机の木目を睨み付けた。ざわめいた心は一向に落ち着かない。

（帰りたい……）

よく海がぼやいている言葉を春彼は心の中で呟いた。拭い切れない居心地の悪さが言い様のない不安を掻き立てる。

そんな不安定な精神状態でも授業は進む。春彼はノートを開き、シャーペンを手にした。そしてふとシャーペンを握る手を見つめる。

（俺はただの中学生だ。特別なことなんて何もない。なのに、どうして……）

こんなことになってしまったのだろう。答えの出ない自問自答は更に不安を煽るだけだった。

チャイムが鳴り、四時限目の終了が宣言された瞬間。クラス中が静けさから解き放たれ、クラスメイトたちはそれぞれ昼食を食べる相談や雑談を始める。そんな中、春彼は弁当の包みを掴むと足早に、逃げるように教室を出た。

弁当を用意する手間から、何故自分の通う中学は給食が支給されないのかと思っていたが今はそれがこの上なくありがたかった。何故なら教室に縛り付けられずに済むからだ。給食支給があったとしても移動は可能だが、動きにくさがいただけでない。

春彼は数学の授業の間、授業を聞きながら考えた。そして考え抜いた結論が、とりあえず転入生を徹底的に避けるだ。一時的な処置だが、やはりあの転入生を避けるに越したことはないだろう。

その考えに基づき、春彼は校舎裏まで足早にやって来た。ここなら落ち着いて昼食がとれるだろう。その後、適当に時間を潰し、授業開始間際に教室へ戻ればいい。

春彼は時間の潰し方を考えながらコンクリートに腰を降ろした。太陽の位置で日陰になっている校舎裏はやや肌寒かったが少し湿った土の匂いはなんとなく気分が和らいだ。

（でも、こんなこと毎日続けるのか？）

春彼は白米をそしゃくしながら心の中で呟く。これでは自分に落ち度があるように思えてならない。

ふと校舎と構内に植えられた木の隙間から見える小さな空を見上げると青い空を雲が泳いでいた。それを眺めながら弁当を食べ進める。何故、こんな日常を守ることがこんなにも難しいのだろう。そんなことを考えている内に弁当箱は空になっていた。自分で作ったものはあまり味が気にならないので気付けば完食してしまう。

秋良と智夏、そして母親がおいしいと言って自分の料理を食べ、自分も一緒に食べている時は美味く感じるのにな、と思いながら空になった弁当を包む。

（秋良と智夏はちゃんと給食食べてるかな……）

そんなことを考えながらぼんやりと空を眺めていた時だった。

「あ、あの……。村主、君？」

不意に聞こえた心細げな少女の声に春彼は身を強ばらせる。聞き覚

えのある声だった。

（風音、柚姫……）

関わらないよう避けていたのにこつも簡単に見つかるとは、と春彼は心の中で舌打ちをすると空の弁当を乱雑に掴み、立ち上がった。

「え？ あ、待って待って！ 人違い、じゃないですよ？ 村主春彼君でしょう？」

春彼の行動に転入生は慌てた様子で春彼の正面に立ち塞がるように回り込んだ。春彼は鋭い視線で彼女を見る。そんな春彼に彼女はやや気後れした様子を見せたがしつかりと春彼と向き合うと、

「村主春彼君……ですよ？」

と確かめるように問いかけた。春彼は警戒心と敵意を露にしながら

「そうだけど、何か用？」

とぶつきらばうに聞き返す。そんな春彼の静かな剣幕に転入生は萎縮したように表情を強ばらせながら次の言葉を探すように視線を泳がせた。そして、その視線は春彼の腕を捉える。

「き、昨日のケガはもう平気？」

なんとか笑顔を作りながらそう問いかける転入生。春彼は微かに眉根を動かすと氷のように冷たく

「……何のこと？」

と言いつた。その途端、少女の整った顔に動揺が広がる。それから少し狼狽えた様子で

「あ、あなた本当に村主春彼君なんですよ？　なら、何のことが分かりますよね？」

と言った。春彼はうんざりとした様子を隠そうともせず、思い切り顔に出すと転入生を睨み付けた。

「分からない。俺は昨日、急いでたら破れたフェンスに袖を引っかけて運悪く怪我をした。で、何故かそれを風音さんが知ってた。それで俺は何を分かってなきゃいけないんだ？」

「フェンスに引っかけて、ケガ……？　ち、違う！　村主君、昨日のことは信じられないようなことかもしれないけどあれは本当のこととで、奴等はまだ村主君のことを狙ってるの！」

そう力強く語りかける転入生を無視して春彼は彼女の横を通り抜ける。しかし、追いつがるように彼女は春彼の腕を掴んだ。

「待って下さい！　お願いです、話を聞いて下さい！　あれは、あの化け物は……！」

そう懇願し、話を続けようとする転入生の手を春彼は振り払う。そして荒々しい感情をそのまま吐き出し、

「俺は！」

と叫んだ。その鬼気迫る様子に転入生は後ずさる。春彼は荒れ狂う

感情の波を必死に抑え、平常心を装おうとしながら転入生を強く睨み付けた。

「俺は何も知らない……！ 頼むから俺に関わらないでくれ！ 俺は、俺はただこの日常を守りたいだけなんだ！」

春彼はそう心の底からの想いを吐き出すと湿った土を蹴り、転入生に踵を返して校舎裏を飛び出した。目の前に広がる校庭にはたくさん生徒がそれぞれに昼休みを楽しみ、あちらこちらから歓声と笑い声が聞こえる。春彼はそんな光景から目をそらすように駆け足で校舎に飛び込んだ。

どうしようもなく身勝手だと分かっているてもあの楽しげな光景を妬んでしまう自分がいる。何故、自分はただの日常を願っているだけなのにそれすらままならないのだろう。何故、彼らはあのように笑っていていられるのだろう。そんな嫉妬と自己嫌悪と荒れ狂う感情の波は治まることなく、心の中でうねり続けている。出来ることなら泣いて叫びたいような気分だが長年自分で泣くことを禁じ続けた涙腺は固く、涙も出ない。ただ荒ぶる感情を持て余しながら走るしかなかった。

しかし、途中でその足は止まった。あまり運動をしない春彼の体力はすぐに底をつく。教室の前、肩を上下させながら荒い呼吸でふらつく体を壁にもたれかからせた。教室からはにぎやかな声が聞こえるが運良く廊下の人通りは少ない。数人の生徒が何事かと春彼をちらりと見ていたが今はそんな視線を気にするような余裕はなかった。

（父さん。俺、どうしたらいいんだ……）

心の中で亡き父の面影に語りかける。答えが返ってくるはずがないと分かっているても問いかけずにはいられなかった。

午後の授業を終え、担任が教室で連絡事項を伝える帰りのロングホームルームで春彼は担任のある言葉を聞き逃すまいと耳を澄ませていた。すでに教科書やノートはバッグにしまい込み、今はそのバッグの持ち手を握りしめている。

「……では。これにてホームルームは終了！ 日直！」

担任の言葉に一人の生徒が立ち上がった。

「起立っ」

その一言に生徒全員が従い、席を立つ。春彼は待つてましたとばかりに立ち上がった。

「礼っ」

日直に続き、生徒全員が礼をする。担任はそれを見届けると出席簿を手に教室を出た。その瞬間数人の生徒が出口に向かって一斉に動き出す。いつもならそれを眺めている立場である春彼も今日はその波の中にいた。

あの昼休みを終えた午後の授業の間に春彼は考えた。自分はこうしたらいいのか、どうしたらこの日常を守れるのか。そして、出た結論が徹底抗戦だった。あの転入生が接触を試みるなら自分はそれを徹底的に回避する。あの転入生には関わらない。その姿勢を貫くことに決めた。

足早に、半ば駆け足で廊下を進み、下駄箱を目指す。その時、

「待つて、村主君！」

と背後から声がかかった。振り返らずとも相手は分かる。春彼は反射的に立ち止まったがまたすぐに歩き出した。

「村主君！　お願いします、話を聞いて下さい！」

一人の男子生徒を追う転入生とそれを無視して歩き続ける男子生徒という構図は周囲からの好奇の視線を瞬く間に集める。春彼はその視線にうんざりとしながらも歩みを止めない。しかし、彼女も頑として諦めなかった。駆け足で春彼の前に回り込む。

「お願いします。あなたの命に関わるんです！」

その一言に周囲がぎょつとした雰囲気をかもし出した。冗談に聞こえれば周囲の生徒たちは気にも止めなかっただろう。だが、彼女の表情はどこまでも本気だった。春彼はうんざりとしながら目の前の転入生を見つめる。彼女はどこまで自分の日常を破壊すれば気がすむのだろう。春彼は思い浮かんだことをそのまま口にした。

「いい加減にしてくれ」

そう言つて春彼は彼女の横を通り抜ける。しかし、それでも彼女は諦めようとしなかった。

「ごめんなさい、迷惑なのは分かってます。でも、本当に危険なんです！　今の村主君の立場は！」

春彼はうんざりを通り越し、微かな殺意に似たようなものを抱き始めていた。一体、彼女が何を言っているのかまるで分からない。訳の分からないことを隣でべらべらと喋り続け、周囲から好奇の視線

を集め続ける。それは春彼にとってこの上なく迷惑。そして、その心を苛立たせる行動だった。春彼は怒鳴り出しそうになるのを必死にこらえ、自分の下駄箱から靴を取り出し、何事もないかのようにそれを履いて外に出た。

「あ、待つて！……あれ、靴どこだっけ！？」

どうやらすぐには追ってこれないらしい。チャンスだと春彼は歩く速度を早めた。本当なら走って逃げるべきところだが自分の体力では逃げれる距離などが知れている。そう考えながら正門を出た時、春彼の目にあるものが止まった。

どこでも見かけるような黒の車に一人の男性が誰かを待つようにもたれかかっている。その容姿は正に容姿端麗を体現する姿だった。すらりとして背が高く、澄んだ金色の髪が肩につくつかないかのところで揺れている。その金髪が映える白い肌には傷一つなく、まるで変装をする芸能人のように黒いサングラスをかけ、口元に微笑をたたえていた。むしろ、実際に芸能関係の人間に見える。これで背後の車が高級外車なら海外ドラマのワンシーンのようだ。正門を通る女子生徒たちはちらちらとその容姿を盗み見ては小声で何かを囁きあっている。

しかし、男はそんな少女たちなど見えていないかのように前方を見ていた。まるで水の流れの中から何かを探しているようだ。

「村主君！」

背後からの声にハツとした。後ろを振り向けば転入生が駆け寄ってきている。春彼はぼうつと呆けていた自分に顔をしかめると転入生から目をそらし、大股で歩き出そうとした。その時、とんとん、と軽く肩を叩かれる。春彼は思わず渋面を作った。

(こんな時に誰だ……っ)

そう思いながら振り向く。すると、そこには口元に微笑をたたえた男が立っていた。サングラスを下にずらし、確かめるように春彼の顔を青い瞳で見つめる。そして、春彼と目が合うとにつこりと目を細めて笑った。

「何かご用ですか？」

急いだ様子で訝しげに問いかける春彼に男はその手を春彼の肩に置いたまま微笑んでいた。

(この人、日本語通じないのか?)

その容姿から、もしかや外国人なのかと春彼が考え始めた時、転入生が背後で驚いたように、

「ら、麗^らさん！」

と声を上げた。春彼は思った以上に近い距離からの声に後ろを振り向く。もう彼女との距離が5mもない。そして、一つ重要なことに気付いた。彼女は誰かの名前を口にした。この状況下で恐らくそれは下校途中の生徒たちのものではない。春彼は正面の男を見据えた。

「お前……」

唸るような低い声で春彼が呟く。しかし、男はそんな剣呑な状況でも口許の笑みを消さず、細めていた目を開くと真っ直ぐに春彼を見た。その目は笑っていない。まるで春彼の疑問を肯定するかのよう
に春彼を見据えていた。

「柚姫。彼がそうかい？」

優しいな声音で麗と呼ばれた男は流暢な日本語で転入生、柚姫に問いかけた。すると、ようやく追い付いた柚姫は

「は、はい……」

と辿々しく答える。その瞬間、春彼は麗の手を振り払い、なけなしの体力で走り出した。しかし、次の瞬間には麗に腕を捕まれる。その外見からは想像できないほど強い力に春彼は思わず表情を歪めた。麗はそのまま春彼を引きずるようにして車の側まで連れてくると後部座席のドアを開き、春彼を強引に押し込んだ。

「な、なんなんだ……っ！」

そう春彼は声を張り上げる。麗はそれを何を言うでもなく見下ろしていた。口元に笑みを浮かべながらも全てを凍てつかせるような冷たい視線で春彼を見ている。春彼は凍り付いてしまったかのように動けなくなった。逆らえない、と本能が直感する。その青い氷の瞳には有無を言わせない、強い光が宿っていた。

麗は無言のまま、後部座席のドアを閉め、運転席に乗り込む。その隣、助手席には柚姫が座り、エンジンがかかった。車体が小刻みに揺れ、車が動き出す。もう逃げ出すことは不可能となっていた。春彼は奥歯を噛み締め、腹をくくると体勢を直し、きちんと座席に腰を降ろした。こんな状況でも徹底抗戦の構えを意地でも崩すものかと心に決める。人の日常を乱し、こんなにも簡単に拉致を行う連中の話など受け入れるものかと強く思った。

その時、後部座席へ振り向いた柚姫と目があつた。柚姫は申し訳なさそうな弱々しい表情で

「……ごめんなさい」

とエンジン音にかき消されそうなほど小さな声で呟くように言う。
春彼はそんな柚姫を一瞥するとふい、と視線をそらした。

「あまり、彼女を責めないでくれるかい？」

ミラー越しに春彼と視線を合わせ、サングラスを外した麗が困ったような笑みを浮かべる。春彼はそれを無言のまま睨み付けた。この状況でよくそんなことを言えたものだと思う。この中で一番責められるべきはお前だろう、と心の中で毒づいた。しかし、春彼の思いとは裏腹に、実にあっけらかんとした様子で麗は口を開く。

「……ああ。そういえば自己紹介が遅れたね。僕は森谷^{もりや}麗。オーナーズ所属の能力所有者だ」

そう言つて微笑む麗に春彼は仏頂面で応じた。オーナーズ、能力所有者、また新しい言葉が出てくる。恐らくオーナーズは何かの組織のことを示しているのだろう。能力所有者は春彼も持っているという力を持つ人間を指しているのだと思う。とりあえず今、春彼に分かるのはこの森谷 麗という男は風音 柚姫の仲間であり、春彼にとっての敵対者であるということだ。

「君を連れ去ることに關しては僕らの上司からの命令でね。彼女は短気だから待たせると厄介なんだ」

麗はそう言つて春彼に困つたように笑いかけた。まるで、春彼の反応など気にもしていない態度に春彼の神経は逆撫でされていく。逆に柚姫は春彼の反応を気にかけ、この空気をなんとか改善しようと

思考をめぐらせているようだが春彼からすればそれも神経の逆撫でだった。

（そもそもの原因は……！）

そう考えるとどこにもぶつけようのない怒りが込み上げてくる。春彼はそれをなんとか抑え込み、窓の外に目をやった。

春彼の通う中学校からしばらく東に進むと駅に着く。この車は正に駅に向かう道を走っていた。その時、春彼はふとある不安に駆られた。

（まさか、電車を使つて更に遠くに連れて行かれるなんてことは……）

だとしたら是が非でも逃げ出さなくてはならない。春彼は窓の外の景色を睨みながら逃げ出す策を講じた。狙うなら車を降ろされた時だろう。駅を使うなら必ず人混みに入る。そこで機会を狙うのが一番可能性が高い。

「大丈夫だよ、目的地はそこまで遠くないから」

そうおかしそうに笑いながら麗が言った言葉に春彼はハツとした。麗はミラー越しに春彼を見て、にっこりと笑う。

「君はおもしろいね。思ったことがすぐに顔に出る。友達にもよくそう言われるだろう？　ねえ、柚姫」

いきなり話を振られた柚姫はびくつと肩を震わせながら、

「え、えっと……。私は、ちょっと分からないです……」

と答えた。この場合、柚姫の反応が正しいと春彼は思う。クラスメイトはもちろん、長年の付き合いである海でさえ感情を押さえ込んでいる春彼の顔から考えていることを言い当てるのは難しいはずだ。

「まあ、心配しないで。別に君が考えているように電車を使って君をどこかに連れ去ろうとしている訳じゃないから」

そう笑顔のまま春彼の思っていたことを言い当てる麗に春彼は警戒心と同じくらい強い不信感を覚えた。他人の神経を逆撫でし、心中を見透かし、笑顔を装っていても目は笑っていない時がある。こんな人間に不信感を抱かない方が不思議だと春彼は思った。何より気味が悪い。あの冷たい視線を思い出すと背筋ひやりとした。

「……困ったな。柚姫、僕はどうも彼に嫌われてしまったみたいだ」

またもや春彼の心中を見抜いたのか、それにしては明るい様子で麗は言った。どうしても春彼には麗が困っているようには見えない。

「そ、そんなことはない……はずですよ！」

そう言っただけで焦った様子で柚姫は春彼を見た。しかし、春彼の鋭い視線にすぐごと引き下がる。この状況でよくそんな希望的観測が出るなど春彼は呆れを通り越して感心した。そんな中、麗は笑顔のまま口を開く。

「僕はどうにも人付き合いが苦手だね。でも、出会ってこんなにも早く嫌われたのは初めてかな」

苦手というより自分から信頼関係を崩壊させていきそんな麗の言葉

に春彼は腹に力を込めた。このまま、一矢報いることも出来ないのは癪に障る。

「ご心配なく。始めから嫌いです」

春彼がそうきつぱりと言い切ると一瞬、麗は驚いたような顔を見せた。柚姫にいたっては顔が完全に硬直している。しかし、次の瞬間には麗の笑い声が車内に響いた。

「あははははっ。そこまではつきり言われたのも初めてだよ。ふふふっ。君は本当におもしろいね」

そう言つて麗はひとしきり笑つと、

「ああ、そうだ」

と何かを思い出したかのように呟いた。そして、車が信号に引つ掛かったのを丁度良いといった様子で春彼の方へ振り向く。

「君、そこにあるファイルをとつてくれないか？ 君に確認事項があるんだ。車内で済ませてしまえば僕らの上司の仕事も減るし、君も早く解放されるで一石二鳥だろう？」

そう言つて相変わらず笑顔のままの麗に春彼は思わず後ずさりそうになった。実際には座席に座っているので大して距離をとることは出来ないが出来るものなら二、三步ほど離れたいと思う。ここまで嫌悪感をあらわにされても飄々としているのは気味が悪いを通り越して異常だ。

「どうかしたのかい？ ファイルならそこだ。君のすぐ左隣にある

だろう？」

麗の言葉に春彼は戸惑いながらも左を見た。確かに灰色の分厚いファイルが無造作に投げ出されている。持ち上げるそれはずしりと重く、春彼はなんとか片手で麗に手渡す。すると麗は笑みを深くして、

「ありがとう。まあ、確認事項と言っても大したことじゃないんだ。面倒だけど決まりだね」

と言った。そして、再び車を発進させると運転をしながら膝の上に開いたファイルをパラパラとめくる。後部座席から見えただけでも小さな字がびっしりと印刷されていた。その文字の大群の中から麗は今必要な情報を探し出す。そして、口を開いた。

「ええっと、名前が村主春彼。男性。中学二年生。十四歳。A型。四月六日生まれ。家族構成は母親が女流ミステリー作家、天都四季あまつしき。本名、村主美季みき。父親は戦場カメラマンの村主彼方かなた。五年前に仕事先で事故死。享年四十歳。兄弟は弟と妹。弟が小学四年生。名前は村主秋良。妹は小学三年生で名前は村主智夏。住所に電話番号……、まあこれは確認しなくていいか。これで間違いないね？」

麗の言葉に春彼は絶句した。今の世の中で口うるさく騒がれている個人情報の保護なんておかまいなしに調べ上げられている。柚姫が自分の名前を知っていたのも頷ける話だ。むしろ、あんなものの序の口だったのだ。

「あ、あのね村主君！ これは必要だからしたことであって、悪用とかはしないから！ 絶対にしません。こんなことされて、すごく嫌な気持ちになったと思う。ごめんなさい」

柚姫はそう言つて謝罪する。そんな柚姫を見て麗は微笑んだ。

「そんなに謝ることはないさ。むしろ、感謝されたつていい。僕らは君と、君の大切な家族を守ろうとしているんだ。それを思えばこれくらい、些細なことだろう?」

そう笑顔で問いかける麗。春彼は家族という単語に目を見開いた。何故ここでその言葉が出てくるのか分からない。春彼の中で抑えつけられていた感情が一気に吹き出した。

「それ……、どういう意味ですか!?!」

「おや……。目の色が変わったね。調査通り、自身より家族に重きをおいているようだ」

まるで煙に巻くような麗の言葉に春彼は怒りをあらわにした。出来るものなら今ここでこの男を締め上げてやりたいと思う。春彼の筋力でそんなことは出来ないと分かっていたがこの怒りに身を委せれば出来るのではないかと思えるほど強い憤りが春彼の中で渦巻いている。

「す、村主君! ごめんなさい。ここでは話せないの。本部に着いたら私たちのリーダーが話してくれるから。それに、お母さんや弟さんと妹さんのことは大丈夫。私たちの仲間が絶対を守るから」

柚姫はそう言つて力強い表情から一転、苦しそくに顔を歪めた。

「本当に、ごめんなさい……」

その謝罪は今までの謝罪よりも苦しげで泣き出しそうな気さえた。そんな様子の柚姫に春彼は何も言えなくなる。一瞬にしてに冷静さが戻り、ここで喚いても仕方がないんだと考えられた。

「柚姫。あれは君が悪いんじゃない。仕方がないことさ。いつまで気に病んでいるつもりだい？」

麗の声音に初めて叱責のような響きが宿った。しかし、柚姫は背もたれにもたれかかり、うつむいたまま拳を握りしめている。麗はやれやれといった様子でため息を吐いた。そして、春彼を見る。

「この子は責任感が強くてね。君のことについても色々考え込んでる。だから、責めないでやってくれないか。一度落ち込むと長引くんだ」

そう困ったように麗は笑った。今度は本当に少し困ったような顔をしているように見える。

柚姫は顔を上げなかった。その横顔は苦痛を耐えるかのように歪んでいる。口は一文字に結ばれ、握った拳は微かに震えていた。

春彼には何が彼女をそこまで責めているのかは分からなかったが、ただ自分はあまりにも自分のことしか見えてなかったと罪悪感を覚えた。

「……さてと。そろそろ到着だ」

その一言に春彼は窓の外を見る。車は駅を越えてしばらく進んだ先にある場所に来ていた。そこはビルが多く、所々に民家や小さな公園が見えるが主に会社のオフィスが密集している地域だ。春彼はあまり来たことのない場所にとてつもなく遠い場所まで来てしまったような気がした。

麗は減速するとハンドルを切り、あるビルの地下駐車場に入った。そして、その一角に車を止めるとエンジンを切る。

「さあ、降りて。到着だ」

麗の言葉に春彼は後部座席のドアを押し開けた。白い蛍光灯に照らされ、がらんとした駐車場は麗の止めた車以外見当たらない。

（いくらなんでも、これは……）

春彼は周囲を見渡し、心の中で呟いた。流石にこの状況はおかしい。普通は少なくともあと何台が見当たりそうなものだ。

「どうかしたのかい？ 僕らの秘密基地の入り口はこっちだ」

そう言つて麗は車に鍵をかけると先行して歩き出した。柚姫は少し戸惑った様子でぎこちなく微笑むと

「えっと、行こうか。早くリーダーの話を聞かないと」

と言った。春彼は何か言葉をかけるべきかと考えて、止めた。これといって何も思い付かない。下手なことを言つてこれ以上彼女を傷つけるのは流石に抵抗があった。とりあえず、何も言わずに頷き、歩き出す。すると、柚姫は安心したような表情を見せた。

（なんで、こいつは知りもしない相手にこんなに一生懸命になれるんだろう）

歩きながら春彼はふとそう思った。自分には絶対に出来ない。極端な話、一番大切なもの。家族や幼馴染みが無事なら誰がどうなるう

と構わないと春彼は思っている。

（俺には出来ない。俺は、俺の大切なものさえ守ればいいとしか
思えない）

春彼は先を行く麗の背を追いながらそう心の中で呟いた。

拉致（後書き）

十二月中に二回も更新できたことに驚いている月神です。

いや、まさかこんなに筆が進むようになるとは……。今の調子なら近日中に次話が出来上がりそうです。年は跨いでしまうと思います
が。

それでは皆様、ここまで読んでいただきありがとうございました。
今年もお世話になりました。そして、よいお年を。

オーナーズ 前編

第五話 オーナーズ 前編

麗がエレベーターの呼び出しボタンを押すとすぐにエレベーターがやって来た。このビルの一角に彼らのいう本部があるのだろうか。春彼はエレベーターに乗り込みながら思う。映画やドラマだと最上階の部屋を陣取っていそうな気もするが、もしかすると裏をかいて適当な階なのだろうか。春彼はそう考えながら麗がボタンを押すのをちらりと見た。すると麗は何のためらいもなく非常用ボタンを押した。

「え!？」

思わず春彼の口から驚きの声もれる。すると麗は春彼を見て悪戯っぽく笑った。

「僕らの秘密基地は誰にも知られないように地下にあるからね。それに、監視カメラで仲間が人物認識をしてるから間違って関係のない人が押しても動いたりはいしないよ」

そう麗が説明している間にもエレベーターは下降していく。どこまで行くのか分からない。この先に何かがあるのかという不安が春彼の中で徐々に大きくなっていった。微かな浮遊感すら煩わしく思える。

その時、その浮遊感が止んだ。そして、エレベーターの鉄扉が開かれる。

春彼の目に真つ先に飛び込んできたのは青みがかった黒いタイルの薄暗い部屋で光を放つ巨大なモニターだった。円形の部屋の壁に沿って180°に広がったモニターには様々な情報が表示されている。世界地図や日本地図も表示され、地域ごとのデータも表示されていた。

部屋はモニターの光を照明代わりにしているようで他の照明器具は見当たらない。また、円形の部屋に合わせて机も円になるよう並べられ、春彼たちから見て一番奥の席には山のように書類が積まれている。まるで、母さんの仕事場みたいだ。そう思うと少し気分が楽になった。そして、その机に誰かが突っ伏していた。それを見た麗は

「やれやれ。部下が懸命に働いている中、上司はお昼寝中だったみたいだ」

と苦笑した。その言葉に柚姫は少し困ったように笑い、

「詩音さんはこういう仕事、嫌いですから」

と言って、突っ伏したまま眠り続ける上司、詩音の側へ歩み寄りとその肩を叩いた。

「詩音さんっ。村主春彼君を連れてきました！ 起きてくださいっ」

「うう……。もう、嫌だ……。書類なんて、書類なんて全部燃やしてや、る……」

柚姫の越えに反応し、何とか目を覚ましたものの半開きの目で辿々しくそんなことを言っ、がくんと再び突っ伏し、二度寝に入ってしまった。

「詩音さんっ。村主君待ってますから！話を聞いたり、したりしなきゃいけないでしょう！起きて、起きてください！」

柚姫はそう言って詩音の体を揺する。しかし、なかなか詩音は起きそうにない。春彼はどうしようもなく不安を感じずにはいられなかった。あれが自分をここまで拉致誘拐してこいと指示した人物なのだろうか。

「君、顔に不安だっけ書いてあるよ」

「ええ。思ってます」

麗でなくとも今の春彼の心中を見透かすことは容易だろう。思いきり顔に出ている自信がある。春彼の回答を聞いた麗はくす、と笑った。

「まあ、そうだろうね。普段の詩音はだらしないから。いざという時はこうじゃないんだけど」

麗はそう言っただに寝ぼけている詩音を見た。柚姫が必死になつて起こそうとしているがなかなか起きそうにない。その様子を見て、麗は苦笑を浮かべながら、

「仕方ない。君は先に部屋に行っていてくれるかい？僕はお茶を淹れてくるから。応接室はあの扉の先だ。少しすればちゃんとした詩音が来てくれるから」

と言っただけの右側から伸びている廊下へと姿を消した。春彼は立ち尽くし、ちらりと背後のエレベーターを見る。部屋と同じ、青み

がかった黒の巨大な柱のような形をしたエレベーターはまだこの階に留まっているようだ。逃げようと思えば逃げられる。春彼はしばらくエレベーターを見つめていたがふい、と目をそらした。逃げたって仕方がない。もし本当に家族に關係する話なら逃げられない。春彼はエレベーターに背を向けると応接間に向かつて歩き出した。

応接室はモニターがあつた部屋と違い、ごく一般的な部屋だつた。白い壁には風景画が飾られ、フローリングの床はよく掃除が行き届いている。茶色い皮の多人数掛けのソファーに白いクロスがひかれた足の短いテーブルが置かれ、そのテーブルに置かれた花瓶には花が飾られていた。

「ふああーつと……。悪い、待たせたな」

不意に背後から聞こえた声に春彼は振り向く。そこには赤く染めた髪をポニーテイルにし、腰まで垂らした髪型でまだ眠たげな顔をした長身の女性、詩音と柚姫が立っていた。詩音は白いシャツとジーンズの上から年期の入ったくたびれた黒のロングコートを羽織っている。

「改めて自己紹介すつと、あたしは桐原詩音^{きはら}。ここ、オーナーズの指揮官だ」

そう言つて詩音は春彼を爪先から頭のとっぺんまで何かを見定めるように見た。そして、にやりと笑う。

「ふーん。確かに昨日の少年だな。まったく、鷹の目と人間の目の差は分かりにくい」

詩音はやれやれと肩を竦めて、どかっとソファ―に座った。その隣に柚姫が座り、詩音はあごで自分の前の場所を指す。

「座んなよ。村主春彼」

春彼はその指示に従い、やや警戒しながらソファ―に腰を下ろすと真っ直ぐに詩音を見据え、

「昨日のつてどういう意味ですか？」

と問いかけた。すると詩音は豆鉄砲を喰らった鳩のような顔をする。

「どーも、こーも……。昨日、あたしが助けてやったろっ？ でなきやお前やられてたぞ」

「詩音さん……。あの状況じゃ分かりませんよ」

そう言つて柚姫は困つたような顔をして春彼を見た。そして、言葉を探すように視線を泳がせ、ゆっくりと口を開く。

「あの、信じられないかもしれないけどね。昨日、間一髪のところ
で村主君のことを助けた鷹がいたでしょう？ あれは詩音さんなん
です」

その言葉に今度は春彼が豆鉄砲を喰らった鳩の顔をした。今、目の前にいる人間と鷹がイコール関係にあるとは考えられない。

「まあ、信じらんないだろうけどな。でも、これがあたしの能力な
訳だ」
スキル

そう言つて詩音は春彼と視線を合わせた。まるで射抜くような視線の鋭さに春彼は目をそらせない。その視線は獲物を狙い定めた猛禽類の眼だった。

「さて、話をまとめるとお前は化け物、ネスターってんだけどな。あれに襲われて能力が覚醒。スキルオーナー能力所有者になった。で、まあその他諸々の話をするためにここ、オーナース本部までご足労いただいたってことだ。……何か質問は？」

詩音が首をかしげる。春彼は微かに頭を振った。あの無機質な白の体、爛々と輝く赤い双眸。思い出すだけで身体中に悪寒が走り、あの頭痛が蘇ってくるような心地がする。しかし、それを認めるわけにはいかなかった。認めてしまえば自分の日常は崩壊してしまう。春彼は口を閉ざしたまま視線を足元に落とした。

「……まさか、まだ認めないつもりか？」

詩音の声音に厳しいものが宿る。しかし、それでも春彼は黙りこんでいた。恐怖の記憶と日常を守りたいという想いが攻めぎ合う。

「俺は……、化け物なんて知りません」

想いが記憶を上回った。この平穏な日常を手離すことは出来ない。自分がこんな非日常に足を踏み入れるということは日常の崩壊を意味する。それだけは出来なかった。その想いが奔流となって春彼の口から放たれる。

「俺は化け物も能力つて力も何も知りません。だから、ここまで拉致される理由もプライバシーも関係なしに個人情報調べ上げられ

る理由もない！　お願いですから俺に関わらないで下さい！　俺は、俺の日常を守りたいだけなんだ！」

春彼はそう捲し立てるように言い切り、荒い呼吸で空気を肺に送った。その様子を詩音は静かに見つめている。そして、春彼の呼吸が落ち着くとまいったなといった様子で深々とため息を吐いた。

「あー……。まあ、お前の主張はもつともかもしれないな。ただ、正直言つてあたしには理解できない」

そう言い切った詩音の瞳は厳しい光を宿しながらもどこか苦しげだった。しかし、表情にはそれを出さず、厳しい表情で春彼と向き合っている。その様子から何かを貫かんとしている意志の強さを感じとれた。

「お前がお前の日常、家族を守りたいようにあたしにも守りたいものがある。だから、お前が譲らないようにあたしも譲れない」

今、春彼の前にいる詩音は先程までの眠たげな女性と同一人物とは思えなかった。恐らくこれが麗の言っていた、いざという時の詩音なのだろう。しかし、春彼も折れなかった。理解できないと言われた直後は自身を否定されたような衝撃を受けたが、落ち着いて考え直せばそんなことはいつものことだった。理解してくれる人間は滅多にいない。それでも春彼は今まで自分の意志を貫いてきた。そして、これからもそれは変わらない。理解されたいとも思わない。理解されずとも自分の貫く意志は揺るがないのだ。

春彼は静かに、真っ直ぐ詩音を見つめた。何を言つべきか、どうすべきか思考を巡らせる。

「……森谷さんから俺の家族にも関わる話があると聞きました。そ

れだけお聞きします。そのあとは家に帰して下さい」

春彼がそう言うのと詩音の視線が鋭くなった。テーブルに肘をつき、両手を組み、その手で口元を隠す。その様子を見た柚姫は表情を強ばらせ、詩音から距離をとった。

「し、詩音さん？ あの、村主君もきつとまだ混乱してるんですよ。だから落ち着きましょう！ ね!？」

距離を取った位置から柚姫がそう言い聞かせるように言う。しかし、詩音は相変わらずの様子で春彼を見据えていた。

「……他に言いたいことは？」

先程よりも低い声で詩音は言う。その隣で柚姫は青い顔をしていた。春彼はその視線にやや気圧されながらもはつきり、

「ありません」

と言い切る。すると詩音は目を伏せ、くくくつと喉を鳴らして笑い出した。しかし、相変わらず口元は隠したままだ。

（……どうしたんだ、この人）

春彼はそう思いながら詩音を見る。すると、詩音は唐突に笑うのを止め、勢いよく顔をあげると更に鋭い視線で春彼を睨み付けた。

「てめえ……」

地の底から響くような低く、震えた声を詩音は発する。ただならぬ

剣幕に春彼は思わず後ずさった。柚姫はもう諦めたように詩音を見つめている。詩音はゆっくりと立ち上がった。その口元はひくひくと引き吊っている。

「言わせておけば……っ」

もしかすると、まずい状況なのかもしれない。春彼はそんな予感がした。そして、柚姫が両手で耳を塞いだのを見て予感が確信に変わる。ああ、地雷を踏んだ、そう心の中で呟いた春彼にその爆発音に備え、耳を塞ぐ時間はなかった。

「いい加減にしろよ！ てめえ、何様だ！ 必要な話だけ話して、家に帰せだあ！？ てめえの勝手で振り回されちゃ迷惑だ！ あたしらはなあ！ 奴等にお前を渡すわけにはいかねんだ！ 事と次第によっちゃあ、てめえをここに監禁する！ それくらいこつちは切羽詰まってるんだ！」

割れんばかりの怒鳴り声に春彼は思わず圧倒された。しかし、気圧されはしない。ここで下がっては向こうの要求を飲むことになる気がした。腹に力を込め、立ち上がる。そして、しっかりと詩音の目を見据えると、小さく息を吸い込んだ。

「あなた方こそ何様だ！ 拉致の次は監禁！？ 非常識にも程がある！ 俺は確かに自分勝手なことを言ったかもしれない。でも、それはあなた達もだ！」

「なんだとお！？ 非常識ってならてめえの方がよっぽどだ！ てめえは……！」

売り言葉に買い言葉で詩音が更に応じようとする。柚姫はなんとか

二人を仲介し、落ち着かせようと慌てふためていた。しかし、二人の間に流れる刺々しい空気になすすべもない。その時だった。

「やあ、賑やかだね」

剣呑な空気の中で一人穏やかに微笑む麗はそう言って部屋に入るとプレートに乗せたティーカップを全員の前に配り、ポットの中の紅茶を注いだ。なんとも場違いな、空気を読まない行動に呆気にとられ、春彼と詩音の間に流れていた刺々しい空気が消えていく。

「砂糖とミルクは自分でどうぞ」

そう言って麗は何事もないように一人掛けのソファに腰を降ろし、カップにミルクを注いだ。

「麗さん……」

気が抜けたように柚姫が呟く。その顔にはみるみる安堵の表情が広がった。そんな柚姫を見て麗はにっこりと微笑む。

「やあ、柚姫。お疲れさま」

麗は柚姫に労いの言葉をかけると春彼を見た。相変わらず笑顔を浮かべているがその目は何か面白いものを見つけたかのような目をしている。

「しかし、意外だな。君があんなに声を荒げて詩音と言い争うなんて。冷静沈着な人物かと思ってたけど少し違うみたいだ」

そう言って麗は優雅な動作で紅茶を一口飲むと次に困ったような笑

みを浮かべながら詩音を見た。詩音は仏頂面で砂糖もミルクも入れていない紅茶をあおるように飲み干すと麗を横目に睨み付ける。

「おい、なんなんだ。コイツは」

先程よりは冷静なようだがその声音にはまだ怒りが滲んでいた。しかし、そんな詩音が当たり前であるかのような対応を麗は返す。

「村主春彼君だよ。何があつたか知らないけど、まあ詩音の語彙の少なさじゃ、彼が混乱するのは容易に想像出来るね」

この詩音という人物をよく知らない春彼でも今の言葉は地雷であるということは容易に想像できた。想像通り、詩音の目付きが額に青筋をたてかねないほどの鋭いものになる。しかし、麗はその視線を一向に意にかえず、にっこりと春彼に微笑んだ。

「君は、家族が大切なんだよね？」

そう言つて麗は小さく首をかしげる。澄んだ色の金髪が微かに揺れた。青い瞳の奥底にある真意を伺いながら春彼は、

「ええ」

と答える。すると麗はふむ、と頷き、カップに口を付けた。妙な緊張感が部屋を満たしていく。詩音は相変わらずの仏頂面、柚姫は春彼と麗のやり取りを不安げに見つめ、それぞれ押し黙っていた。

麗は言葉を探すようにカップの中を見つめ、顔を上げた。その表情からは笑みは消え、その反応を推し測るような目で春彼を見ている。そして、口を開いた。

「単刀直入に言おう。君を襲ったあの化け物たちは君の家族を狙う」

「は……っ!？」

たったそれだけの言葉が春彼には十分過ぎる衝撃だった。思わず言葉として意味をなさない声が口から飛び出す。まるで後頭部を鈍器で殴られたようだ、と春彼は思った。幸せなことに今までの人生で後頭部を鈍器で殴られるような経験はなかったが、恐らく殴られたらこんな気分なのだろうと思う。

あまりの衝撃に思考がまとまらない。昨日の経験と家族の顔が頭の中で不規則に流れていく。動悸が徐々に早くなっていき、息が苦しくなるのを春彼は感じた。

オーナーズ 前編（後書き）

明けましておめでとございます。

新年初の更新です。そして、初の試みである前後半分けでもありません。

友人から「文の量が多い」との指摘を受けたための試みです。

これで少しでも読みやすくなればと思います。

これからも読みやすくなるよう努力しますのでご指摘のほど、よろしく願います。

オーナーズ 後編

第五話 オーナーズ 後編

「……おい、お前のやり方の方がよっぽど混乱させてんじゃないか」
詩音が口を開く。その声色にはどこか春彼を気遣い、麗をいさめるような雰囲気があった。しかし、麗は態度を変えずに

「この手の相手には一番重要な情報を伝えるのが一番いいんだよ。そうしたら、聞かざるをえない状況になるだろう？」

と言う。その台詞に春彼は思わず麗に掴みかかりかねないほどの怒りを覚えた。しかし、それと同時にありったけの自制心で怒りの衝動を抑えつける。ここで感情的になっても仕方ない。落ち着け。そう自分に言い聞かせた。

（……断片的な情報だけで判断するな。ここで冷静さを失ったら何も分からなくなる。落ち着け、余計なことを考えるな……）

そう自分に言い聞かせ、ざわついた心を落ち着けると春彼は麗をちらりと見て詩音に向き直った。すると麗は微笑を浮かべ、口を開く。

「へえ、すごいね。もう持ち直した」

その言葉に抑えつけた怒りが再び暴れ出しそうになる。しかし、もう一度心の中で落ち着け、と唱えると

「教えて下さい。森谷さんの言葉の意味を」

と静かな声で詩音に言った。詩音は春彼が話を聞ける状態なのか確かめるように押し黙り、険しい表情でその目を見つめていたが、しばらくするとふっと表情を和らげる。

「分かった」

そう言つて詩音は姿勢を正した。そして、麗を軽く睨み付ける。しかし、麗は大したことではないといった様子で静かに微笑んでいた。その様子に詩音はため息を吐き、春彼を見る。

「まず、話の前にこの馬鹿のことは謝る。悪いな」

「……いえ。なんとなく森谷さんがこういう人だと分かってきたので構いません」

春彼がそう言つと麗はくすくすと目を細めて笑った。

「大人だね、君は」

「図体でかいけどガキは黙つてろ。柚姫！ 子守りは任せた」

詩音の言葉に柚姫は困惑した様子で詩音と麗を交互に見て、

「こ、子守りですか……？」

と言う。思わず春彼はそこは真に受けなくていいだろう、と心の中で呟いた。詩音も同じことを思つたらしく、乱雑に首の後ろを掻く

と、

「あー、分かった。その馬鹿見張っててくれ」

と言い換え、返事を待たずに春彼と視線を合わせ、目配せをした。微かに肩をすくめ、やれやれといった表情をしている。恐らく気にしないでくれということだろう。春彼は小さく頷いた。

「じゃ、本題だ。お前の知りたい情報から話していこう。昨日、お前を襲った化けモンについてだ。……いい加減、認めるよな？」

春彼の確認に春彼は黙りこんだ。心には諦めと家族を守りたいという想いが入り混ざっている。

無駄な抵抗はもうやめよう、と諦めが呟いた。昨日のあの出来事。あの時点で自分が今まで必死に守ってきた日常は砂の城のように崩れ去ってしまったんだ。諦めはそう力無く春彼に語った。

家族を守りたいんだろう、と想いが言った。信念と言ってもいいその想いは春彼の背中を押す。そのためなら今まで何だって犠牲にしてきただろう。想いはそう春彼に今までの思い出させるように言った。

「……はい」

春彼は小さくだがしっかりと頷いた。詩音は満足げに頷き返す。

「ま、分かるよ。信じらんねえってのは。誰だっただあるよな、そーゆーのは」

詩音はそう言ってどこか遠い過去を見つめるような目をして懐かしげに微笑んだ。しかし、それは一瞬のことですぐに表情が引き締ま

り、真面目なものに変わる。

「あれはな、難しく言う精神寄生物質っつーんだ。あたしらはネスターって呼んでる」

その説明に春彼は違和感を覚えた。今の雰囲気なら質問は可能だろう。春彼は低く挙手をしてその意思があることを表示すると

「質問、いいですか？」

と言った。詩音は特別気分を害したような素振りは見せず、

「おう。いいぞ」

と応じる。春彼は頭の中の情報を整理し、一呼吸おいて自身を落ち着かせた。柚姫や詩音、麗の事情を知るということは自分から今まで必死に守っていた日常を壊すことになる。話を聞く、日常の崩壊を認める決心をしても自分から足を踏み込むのはやはり気後れがあった。しかし、知ると決めたならとことん突き詰めようとも思う。

中途半端な情報を手にしても仕方がない、と春彼は腹に力を込めた。

「精神寄生物質、て言いましたよね。じゃあ、そのネスターっていうのは生物じゃないんですか？」

春彼の疑問に詩音はにやり、と笑みを浮かべる。そして、感心したように

「いやあ、いいところに気付いたな。そう、連中は物質なんだ。生物じゃなくてな」

と言った。その言葉を引き継ぐように今まで黙っていた麗が口を開く。

「昨日、君を襲ったネスターはまるで生物のように動いていたはずだ。でも、生物が自分の身体を好き勝手に変えることが出来ると思うかい？」

麗の言葉に春彼は少し考えると

「普通なら出来ないと思います。でも、あのネスターは普通の範囲に入らない。それに、あれは俺を狙っていた。俺には自分の身体を自由に変形させられる化け物に見えました」

と答えた。すると麗は笑みを浮かべ、興味深そうに春彼を見た。

「分析が上手だね。確かにそうも見える。確かに僕らも前まではそう考えてた。でも違うんだ」

そう言つて麗は続きの説明を求めるように詩音に目をやる。詩音は主導権を取られたためかやや不機嫌そうに麗を睨むと春彼を見た。

「あたしらも一応研究は進めてんだけどネスターについては分からないことが多い。でも、最近分かったのがネスターが物質だつてことだ。連中、生物として必要なもんがないんだよ。細胞組織、心臓、その他臓器、性格には手も足も目もない。あたしらが手足やら目に見えてるのは連中にとってただの飾りみたいなもんだ」

「だから物質。どういう仕組みかは分かってないけど質量なんてお構い無しの変形が出来る、ね」

麗は締め括るようにそう言って紅茶をすすった。目眩がしそうな話だと春彼は思う。こんなことが現実にあるなんて思ってもみなかった。

「……でも、物質に自我があるんですか？ あれは確かに俺を狙っていたはずですよ」

未解決の疑問を春彼が口にする。詩音の表情が深刻みを帯びた。その隣に座る柚姫も居住まいを正す。しかし、麗は特にどうということもなく、相変わらず微笑んでいた。

「そう、そこなんだよ。連中は物質だ。でも、自我。いや、目的意識がある」

詩音はそう言ってちらりと麗を見た。麗は何も言わずに詩音を見返す。その様子に詩音は何も言わず、春彼に視線を移すと静かに

「これが、お前の知りたいことだ」

と言った。春彼は微かに目を見開き、詩音を凝視する。詩音は静かに春彼を見ると深く息を吐き、口を開いた。

「ネスターが狙うもの。それは人の精神だ。精神寄生物質って時点で分かっただろーが、連中は人間の精神に寄生、侵食を開始し、最終的にはその精神を乗っ取る。で、更に他の人間の精神に寄生して成長する」

「……それ、人間はどうなるんですか……？」

考えたくはなかったが訊かずにはいられなかった。詩音は淡面で春

彼を見つめている。まるで、聞かない方がいいと言っているようだった。しかし、その時。麗が口を開いた。

「寄生されたばかりなら体調に微かな異変が起きる。侵食が進行していけば徐々に精神が狂う。そして、最後は精神を食い尽くされ、廃人。これが犠牲者の末路さ」

麗はそう、大したことではないとでも言うような口調で言った。しかし、春彼にとっては大したこと、というよりかなり危険なことだ。自分はそんな危険なものと遭遇したのか、そう思うと今さらながら足がすくんだ。

「おい、麗！」

詩音が声を荒げる。話すつもりはなかったのを麗が話してしまったことを咎めているのだろう。しかし、麗は罪悪感など微塵もないように詩音を見た。その横顔は自分のしたこと何の疑いもなく、いさめられるいわれなどないと物語っている。

「いつかは知ることさ。隠す必要なんてないだろう？」

そう言つて麗は詩音が何故自分を咎めているのか分からないといった様子で肩をすくめた。詩音はうんざりとした険しい表情を作る。そして、諦めたように

「……お前はそういう奴だよな」

と呟き、忌々しげに舌打ちをした。そんな詩音に相変わらぬ様子で麗は微笑みかける。ひどく温度差のある空気に春彼は今さらながらこの二人の相性は最悪なのではないか、と不安を感じずにはいら

れなかった。

そんな中、詩音は麗にティーカップを差し出し、ぶっきらぼうに

「茶」

と言ってお代わりを要求する。そんな態度の詩音に麗は笑みを崩すことなく、

「はいはい。冷めてしまったから新しく淹れてくるよ」

と応じ、席を立つと部屋を出た。これがこの二人にとっての当たり前なのだろうかと春彼は思う。もしくは森谷麗という人物は誰にでもあんな神経を逆撫でするような言動や行動をとるような人物なのだろうか。春彼がそう考えていると、

「……悪い」

と詩音は謝罪の言葉を口にした。恐らく、麗が口外してしまった事実と今のやりとりをみせてしまったことの両方についての謝罪だろう。

「いえ、大丈夫です」

そう言いつつも春彼は内心、叫び出したいほどの恐怖を抱え、震えていた。恐れたのは寄生された不特定多数の人間の末路に自分を重ねたからではない。そこに家族を重ねたからだ。麗の言ったネスタ―は春彼の家族を狙うという言葉が更に重みを増して春彼にのしかかる。

「村主君。心配しないで」

不意に柚姫が口を開いた。春彼が詩音から柚姫に視線を移すと柚姫はどこかまだ春彼の視線に萎縮する様子を見せたがしつかりと春彼を見ている。

「ネスターの好きにはさせない。そのために、私がいるから」

柚姫はそう断言するかのような強い口調で言った。何か張り詰めたような、気負うような表情に春彼はここにくるまでの間の車内で彼女がうつ向いていた時と同じような雰囲気を感じた。その表情にはどこか影がありながら確固たる意志が見える。

その時、詩音が動いた。左手を振り上げ、その左手を柚姫の頭めがけて振り下ろす。

「ひゃっ!？」

「私たち、の間違いだろ、柚姫」

そう言つて詩音は短い悲鳴を上げた柚姫の頭をわしわしと撫でた。あまりにも唐突な行動に当事者の柚姫だけではなく、見ていただけの春彼も驚かされる。しかし、その表情は柔らかく、優しかった。その表情と行動の落差にも春彼は驚きつつ、しかし勢いがありすぎるだろうと春彼は思っていた。

「し、詩音さん……。痛いです……」

案の定、有り余った勢いは柚姫にダメージを与えていたようだ。柚姫の台詞に詩音は、

「ん？ ああ、悪い悪い」

と言って手を離れた。そして、表情を柔らかなものから好戦的なものに変えて春彼を見る。その口元には笑みが浮かんでいた。

「まあ、そういうことだ。あたしがいる限り連中の好きにはさせない。そのためのオーナーズだからな」

オーナーズ 後編（後書き）

というわけで後編。扱いとしてはまだ第五話です。

現在第六話を鋭意執筆中です。

能力、その所有者、オーナーズとは？ そんな内容になる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7985t/>

オーナーズ 聖域の目覚め

2012年1月8日19時54分発行